

全國をほろぼさんとて来るなり

六 なんぢら泣號ぶべしエホバの日ちかづき全能者よりいづる敗亡きたるべければなり 七 この故にすべての

手はたれ凡の人のこゝろは消ゆかん 八 かれら憎きおそれ艱難と憂とにせまられ子をうまんとする婦のごとく苦

しみ互におどろき相みあひてその面は餓のごとくならん 九 視よエホバの日苛くして忿恚とはげしき怒とをもて

來りこの國をあらしその中よりつみびとを絶滅さん 一〇 天のもろもろの星とほしの宿は光をはなたす日はいで

てくらく月はその光をかゞやかさざるべし 二 われ惡ことのために世をつみし不義のために惡きものをばつし

驕れるものの誇をとゞめ暴ぶるものの傲慢をひくゝせん 三 われ人をして精金よりもすくなくオフルの黄金より

も少なからしめん 四 かくて亦われ萬軍のエホバの忿恚のとき烈しき怒りの日に天をふるはせ地をうごかしてそ

の處をうしなはしむべし 五 かれらは逐るゝ鹿のごとく集むるものなき羊のごとくなりて各自おのれの民にかへ

りおのれの國にのがれゆかん 六 すべて其處にあるもの見出さるれば刺れ拘留らるゝものは劍にたふされ 七 彼

等の嬰兒はその目前にてなげくだかれその家財はかすめうばはれその妻はけがさるべし 八 かれらは弓

をもて若きものを射くだき腹の實をあはれむことなく小子をみてをしむことなし 九 すべての國の中にてうるは

しくカルデヤ人がほこり飾となせるバビロンはむかし神にほろぼされたるソドム、ゴモラのごとくならん 一〇

ここに住むもの永くたえ世々にいたるまで居ものなくアラビヤ人もかしこに幕屋をはらず牧人もまたかじこにはそ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

イザヤ書 一三・六一—二〇

喜びたのしみ牛をほふり羊をころし肉をくらひ酒をのみていふ我儕くらひ且のむべし明日はしねなければなりと
 萬軍のエホバ黙示をわが耳にきかしかめたまはくまことにこの邪曲はなんぢらが死にいたるまで除き清めらる
 るを得ずとこれ主萬軍のエホバのみことばなり

主ばんぐんのエホバ如此のたまふゆけ宮ををさめ庫をつかさどるセブナにゆきていへ
 いかはりありやまた茲にいかなる人のありとして己がために墓をほりしや彼はたかきところに墓をほり磐をう
 がちて己がために住所をつくれり
 視よエホバはつよき人のなげうつごとくに汝をなげうちたまはん
 ちを包みかためふりまはして闊かなる地に球のごとくなげいだしたまはん主人のいへの恥となるものよ汝そこに
 て死そのえいぐわの車もそこにあらん
 我なんぢをその職よりおひその位よりひきおとさん
 その日われわ
 が僕ヒルキヤの子エリアキムを召て
 なんぢの衣をきせ汝の帯をもて固めなんぢの政權をその手にゆだねべし
 斯てかれエルサレムの民とユダの家とに父とならん
 我またダビデのいへの鑰をその肩におかん彼あくればと
 づるものなく彼とづればあくるものなし
 我かれをたて、堅處にうちし釘のごとくすべし而してかれはその
 父の家のさかえの位とならん
 その父の家のもろもろの榮はかれがうへに懸るその子その孫およびすべての
 器のちひさきもの皿より瓶子にいたるまでも然らざるなし
 萬軍のエホバのたまはくその日かたき處にうちた
 る釘はぬけいで斫れておちんそのうへにかゝれる負もまた絶るべしこはエホバ語り給へるなり

第三章

ツロに係るおもにの預言いはく
 タルシシのもろもろの舟よなきさけベツロは荒廢れて屋なく入べきところなければなりかれら

イ賽五六・二 哥前 一五・三二
 母前三・一四 結二 ホ王下二八・三七 賽 七 結二六、
 四 一五・三二 四・一三 三六・三 王下二八・一八 七 又明九・八 二七、二八、
 二 王上四・六 へ 母後一八・一八 三 王下二四・四 七 二五・二二、四七 二九・九 聖九、
 二 王上四・六 へ 母後一八・一八 三 王下二四・四 七 二五・二二、四七 二九・九 聖九、

ヨ賽二三・二
 タ結二八・二、二二
 ヲ賽二二・九
 ヲ賽二二・一 結二七
 二五、三〇

此事をキツテムの地にて告しらせらる
 うみべの民よだせ曩には海をゆきかふシドンの商賈くさぐさの物を
 かしこに充せたり
 ツロは大なる水をわたりくるシホルの種物とナイルがはの穀物とによりて收納をえたり
 ツロはもろもろの國のつどふ市なりき
 シドンよはづべしそは海すなはち海城かくいへり曰くわれ苦しまず
 うまず壯男をやしなはず處女をそだてざりきと
 この音信のエジプトにいたるとき彼等ツロのおとづれによ
 りて甚くうれふべし
 なんぢらタルシシにわたれ海邊のたみや汝等なきさけぶべし
 これは上れる世にし
 へよりありし邑おのが足にてうつり遠くたびすまひせる邑なんぢらの樂しみの邑なりしや
 斯のごとくツロに對ひてはかりしは誰なるかツロは冕をさづけし邑その中のあきうどは君その中の貿易す
 るものは地のたふとき者なりき
 これ萬軍のエホバの定め給ふところにしてすべて華美にかざれる驕奢をけが
 し地のもろもろの貴者をひくゝしたまはんが爲なり
 タルシシの女よナイルのごとく己が地にあふれよなん
 ぢを結びかたむる帯ふたゝびなかるべし
 エホバその手を海の上にのべて國々をふるひうごかしたまへりエホ
 バ、カナンにつきて詔命をいだしその保砦をこぼたしめたまふ
 彼いひたまはく虐げられたる處女シドンのむ
 すめよ汝ふたゝびよるこぶことなかるべし起てキツテムにわたれ彼處にてなんぢまた安息をえじ
 カルデヤ人のくにを視よこの民はふたゝびあることなしアツスリヤ人この國を野のけもの居所にさだめ
 たりかれら櫓をたてもろもろの殿をこぼちて荒墟となせり
 タルシシのもろもろの舟よなきさけべなんぢの
 保砦はくだかれたり
 その日ツロは七十年のあひだ忘れらるべしひとり王のながらふる日のかすなり七十年
 終りてのちツロは妓女のうたのごとくならん
 さきに忘れられたるうかれめよ琴をとりて城市をへめぐり巧に

二七 弾じておほくの歌をうたひ人にふたゝび記念らるべし 七十年をはりてエホバまたツロを顧みたまはんツロは
 二八 ふたゝびその利潤をえて地のおもてにあるもろもろの國と淫をおこなふべし 一八 其の貿易とその獲たる利潤とは
 二九 きよめてエホバに獻ぐべければ之をたくはへず積ことをせざるなりその貿易はエホバの前にをるもの用となり
 三〇 飽くらふ料となり華美なるころもの料とならん

第二章

一 視よエホバこの地をむなしからしめ荒廢れしめこれを覆へしてその民をちらしたまふ かくて
 二 民も祭司もひとしく僕も主もひとしく下婢も主婦もひとしく買ものも賣ものもひとしく貸ものも借
 三 ものもひとしく利をはたるものも利をいだす者もひとしくこの事にあふべし 地はことごとく空しくことごと
 四 く掠められんこはエホバの言たまへるなり 地はうれへおとろへ世は萎おとろへ地のたふときものも萎はてた
 五 り 民おきてにそむき法ををかしとこしへの契約をやぶりたるがゆゑに地はその下にけがされたり 六 この
 六 ゆゑに呪詛は地をのみつくしそこに住るものは罪をうけまた地の民はやかれて僅かばかり遺れり 七 あたらしき
 七 酒はうれへ葡萄はなえ心たのしめるものはみな歎息せざるはなし 八 鼓のおとは寂まり歡ぶものも聲はやみ琴の
 八 音もまたしづまれり 九 彼等はふたゝび歌うたひ酒のます濃酒はこれをのむものに苦くなるべし 一〇 騒ぎみだれ
 九 たる邑はすでにやぶられ毎家はことごとく閉て人のいるなし 一 街頭には酒の故によりて叫ぶこゑありすべての
 一〇 歡喜はくらくなり地のたのしみは去ゆけり 二 邑はあれすたれたる所のみのこりその門もこぼたれて破れぬ
 一 一の地のうちにてもろもろの民のなかにて遺るものは橄欖の樹のうたれしもの果の如く葡萄の收穫はてしもの
 一の實のごとし

イ 一七・二二 二七・二二、一三 へ馬四六 七・三四、一六、
 二四・二二、一三 未創二七 民三五 九、二五、一〇 結 一七、五、六
 へ 四・九 一三・二二 一〇・二二 二六・一三 何二・

又 馬一・一 四八・四三、四四 歌詩一八七 七・七六、二二 一三・一〇、一六、
 五・二九 五・二九 三・二七 一・二二 九・二五、一〇 結 一七、五、六 一・九 結 三二、七 八・二八
 王上 一九・二七 耶 一・七、一 夕 一・九、二四 夕 一・九、二四 一・三、一五 一・九、二八
 一・三、一五 一・九、二八 一・三、一五 一・九、二八 一・三、一五 一・九、二八

一四 これらのもの聲をあげてよばはんエホバの稜威のゆゑをもて海より歡びよばはん 一五 この故になんぢら東
 一六 にてエホバをあげめ海のしままにてイスラエルの神エホバの名をあげむべし 一六 われら地の極より歌をきけり
 一七 いはく榮光はたゞしきものに歸すと 一八 われ云らく我やせおとろへたり我やせおとろへたり我はわざはひなるかな欺騙者はあざむき欺騙者はいつ
 一九 はりをもて欺むけり 二〇 地にすむものよ恐怖と陷阱と罟とはなんぢに臨めり 二一 おそれの聲をのがるゝ者はおと
 二二 しあなに陥りおとしあなの中よりいつるものは罟にかゝるべしそは高處の窓ひらけ地の基ふるひうごけばなり
 二三 地は碎けにくだけ地はやぶれにやぶれ地は揺にゆれ 二四 地はふるる者のごとく踏きによるめき假慮のごとく
 二五 ぶりうごくその罪はそのうへにおもく遂にたふれて再びおくることなし 二六 その日エホバはたかき處にて高きところの軍兵を征め地にて地のもろもろの王を征めたまはん 二七 かれら
 二八 は囚人が阱にあつめらるゝごとく集められて獄中にとざされ多くの日をへてのち刑せらるべし 二九 かくて萬軍
 三〇 のエホバ、シオン、山およびエルサレムにて統治めかつその長老たちのまへに榮光あるべければ月は面あからみ
 三一 日ははちて色かはるべし

第二章

一 エホバよ汝はわが神なり我なんぢを崇めなんぢの名をほめたゝへん汝さきに妙なる事をおこなひ
 二 古時より定めたることを眞實をもて成たまひたればなり 三 なんぢ邑をかへて石堆となし堅固なる
 四 城を荒墟となし外人の京都を邑とならしめず永遠にたつことを得ざらしめたまへり 五 この故につよき民は
 六 なんぢをあげめ暴びたる國々の城はなんぢをおそるべし 七 そはなんぢ弱きものの保砦となり乏しきものの難の

九 かれは誰にをしへて知識をあたへんとするか誰にしめして音信を曉らせんとするか乳をたち懐をはなれたる者にするならんか
 一〇 その誠命にいましめをくはへ誠命にいましめをくはへ度(のり)にのりをくはへ此にもすこしく彼にもすこしく教ふ

二一 このゆゑに神あだし唇と異なる舌をもてこの民にかたりたまはん
 二二 曩にかれらに言たまひけるは此は安息なり疲困者にやすみをあたへよ此は安慰なりとされど彼らは聞ことをせざりき
 二三 斯るがゆゑにエホバの言かれらにくだりて誠命にいましめをくはへ誠命にいましめをくはへ度(のり)にのりをくはへ度(のり)にのりをくはへ此にもすこしく彼にもすこしくをしへん之によりて彼等すゝみてうしろに仆れそこなはれ咎にかゝりて捕へらるべし

二四 なんぢら此エルサレムにある民ををさむるところの輕慢者よエホバの言をきけ
 二五 なんぢらは云りわれら死と契約をたて陰府とちぎりをむすべり漲りあふるゝ禍害のすぐるときわれらに來らしそはわれら虚偽をもて避所となし欺詐をもて身をかくしたればなりと
 二六 このゆゑに神エホバかくいひ給ふ視よわれシオンに一つの石をすゑてその基となせりこれは試をへたる石たふとき隅石かたくするたる石なりこれに依頼むものはあわつることなし
 二七 われ公平を準繩とし正義を錘とす斯て電はいつはりにてつくれる避所をのぞきさり水はその置れたるところに漲りあふれん
 二八 なんぢらが死とたてし契約はきえうせ陰府とむすべるちぎりは成ことなしされば漲り溢るゝわざはひのすぐるとき汝等はこれに踐たふさるべし
 二九 その過るごとになんぢらを捕へん朝々にすぎ晝も夜もすぐこの音信をきゝわきまふるのみにても惱きをるなり
 三〇 その状は床みじかくして身をのぶることあたはず食せまくして身をおほふこと能はざるがごとし
 三一 そはエホバ往昔ベラヂムの山にて起たまひしがごとし

二 くにたちギベオン(の)谷にて忿恚をはなちたまひしが如くにいきどほり而してその所爲をおこなひ給はん奇しき所爲なりその工を成たまはん異なる工なり
 三 この故になんぢら侮るなかれ恐くはなんぢらの縲紲きびしくならん我すでに全地のうへにさだまれる敗亡あるよしを主萬軍のエホバより聞たればなり
 四 なんぢら耳をかたぶけてわが聲をきけ懇ろにわが言をきくべし
 五 農夫たねをまかに何で日々たがへし日々その地をすきその土塊をくだくことのみを爲んや
 六 もし地の面をたひらかにせばいかで罌粟をまき馬芹の種をおろし小麦をうねにうゑ大麥をさだめたる處にうゑ粗麥を畔にうゑざらんや
 七 斯のごときはかれの神これに智慧をあたへて教へたまへるなり
 八 けしは連枷にてうたす馬芹はそのうへに車輪をきしらせ罌粟をうつには杖をもち馬芹をうつには棒をもちふ
 九 麥をくだくか否くるまにきしらせ馬にふませて落すことはすれども斷すしかするにあらずこれを碎くことをせざるべし
 一〇 此もまた萬軍のエホバよりいづその謀略はくすしくその智慧はすぐれたり

第二十九章
 一 あゝアリエルよアリエルよあゝダビデの營をかまへたる邑よとしに年をくはへ節會まはりきたらば
 二 われアリエルをなやまし之にかなしみと歎息とあらしめん彼をアリエルのごとき者となすべし
 三 われ汝のまはりに營をかまへ保砦をきづきて汝をかこみ櫓をたてゝなんぢを攻べし
 四 かくてなんぢは卑くせられ地にふしてもいひ塵のなかより低聲をいだしてかたらん汝のこゑは巫女のこゑのごとく地よりいで汝のことは塵のなかより轉づるがごとし
 五 然どなんぢのあだの群衆はこまやかなる塵の如くあらぶるもの群衆はふきさらるゝ糞糠のごとくならん

ハネスにきたれり 五 かれらは皆おのれを益することあたはざる民によりて恥をいづくかの民はたすけとならず
益とならずかへりて恥となり謗となれり

六 南のかたの牲畜にかゝる重負のよげん 曰く

かれらその財貨を若き驢馬のかたにおはせその寶物を駱駝の背におはせて牝獅牡獅まむし及びとびかける
蛇のいづる苦しみと艱難との國をすぎて己をえきすること能はざる民にゆかん 七 そのエジプトの助はいたづら
にして虚しこのゆゑに我はこれを休みをるラハブとよべり

八 いま往てこれをその前にて牌にしるし書にのせ後の世に傳へてとこしへに證とすべし 九 これは恃れる民
いつはりをいふ子輩エホバの律法をきくことをせざる子輩なり 一〇 かれら見るものに對ひていふ見るなかれと

一 黙示をうる者にむかひていふ直きことを示すなかれ滑かなることをかたれ虚偽をしめせ 二 なんぢら大道をさり
逕をはなれわれらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれと 三 此によりてイスラエルの聖者かくいひたま

四 ふなんぢらこの言をあなどり暴虐と邪曲とをたのみて之にたよれり 五 斯るがゆゑにこの不義なんぢらには凸出
ておちんとするたかき垣のさけたるところのごとくその破壊にはかに暫しが間にきたらんと 六 主これを破り

七 あだかも陶工の瓶をくだきやぶるがごとくして惜みたまはずその碎のなかに爐より火をとり池より水をくむ
ほどの一片だに見出すことなからん

八 主エホバ、イスラエルの聖者かくいひたまへりなんぢら立かへりて靜かにせば救をえ平穩にして依頼まば
力をうべしと然どなんぢらこの事をこのまざりき 九 なんぢら反ていへり否われら馬にのりて逃走らんとこの

イ耶二・二六 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七
ハ申三・二〇 第一 二・二七・一三 米 二・二一
四・三〇・一 二・六 二・六六・三
ト耶一・二二 耶二 二 王上二二・二三 米 又耶二九・五
ル詩二九 耶一九・ワ太二三・三七
イ耶二・二六 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七
九・一・二二 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七 何八・二耶三七・七

一七 故になんぢら逃走らん又いへりわれら疾きものに乗んとこの故になんぢらを追もの疾かるべし 一七 ひとり叱咤す
れば千人にげはしり五人しつたすればなんぢら逃走りてその遺るものは僅かに山嶺にある杆のごとく岡のうへ
にある旗のごとくならん

一八 エホバこれにより侯てのち恩恵を汝等にほどこしこれにより上りてのちなんぢらを憐れみたまはんエホバ
は公平の神にましませり凡てこれを俟望むものは福ひなり 一九 シオンにをりエルサレムにをる民よなんぢは再び

二〇 なくことあらしそのよばはる聲に應じて必ずなんぢに恵をほどこしたまはん主きよたまふとき直にこたへたまふ
べし 主はなんぢらになやみの糧とくるしみの水とをあたへ給はんなんぢを教るもの再びかくれじなんぢの目

二一 はその教るものを恒にみるべし 二二 なんぢ右にゆくも左にゆくもその耳にこれは道なりこれを歩むべしと後邊に
てかたるをきかん 二三 又なんぢら白銀をおほひし刻める像こがねをはりし鑄たる像をけがれし穢物のごとく

二四 打棄ていはん去れと 二五 なんぢが地にまく種に主は雨をあたへまた地になりいづる糧をたまふその土産こえて豊かならんその日
なんぢの家畜はひろき牧場に草をはむべし 二六 地をたがへす牛と驢馬とは團扇にてあふぎ箕にてとほし鹽をくは

二七 へたる飼料をくらはん 二八 大なる殺戮の日やぐらのたふるゝ時もろもろのたかき山もろもろのそびえたる嶺に河
とみづの流とあるべし 二九 かくてエホバその民のきすをつゝみそのうたれたる創痕をいやしたまふ日には月の

三〇 ひかりは日の光のごとく日のひかりは七倍をくはへて七の日のひかりの如くならん 三一 視よエホバの名はとほき所よりきたりそのはげしき怒はもえあがる焰のごとくその唇はいきどほりにて

三二 視よエホバの名はとほき所よりきたりそのはげしき怒はもえあがる焰のごとくその唇はいきどほりにて

三三 視よエホバの名はとほき所よりきたりそのはげしき怒はもえあがる焰のごとくその唇はいきどほりにて

二八 みちその舌はやくつくす火のごとく 三〇 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

みちその舌はやくつくす火のごとく 三〇 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

その氣息はみなぎりて項にまでいたる流のごとし且ほろびの篩にてもろ
 もろの國をふるひ又まどはす韁をもろもろの民の口におきたまはん 三九 なんぢらは歌うたはん節會をまもる夜の
 ごとしなんぢらは心によるこばん笛をならしエホバの山にきたりイスラエルの磐につくときのごとし 四〇 エホバ
 はその稜威のこゑをきかしめ烈しき怒をはなちて焼つくす火のほのぼと暴風と大雨と雹をもてその臂のくだる
 ことを示したまはん 四一 エホバのこゑによりてアツスリヤ人はくじけん主はこれを答にてうちたまふべし 四二 エ
 ホバの豫じめさだめたまへる杖をアツスリヤのうへにくはへたまふごととに鼓をならし琴をひかん主はうごき
 ふるふ戦闘をもてかれらとたゝかひたまふべし 四三 トベテは往古よりまうけられまた王のために備へられたり
 これを深くしこれを廣くしこゝに火とおほくの薪とをつみおきたりエホバの氣息これを硫黄のながれのごとく
 に燃さん

第三章

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

助をえんとてエジプトにくだり馬によりたのむものは禍ひなるかな戦車おほきが故にこれにた
 のみ騎兵はなはだ強きがゆゑに之にたのむされどイスラエルの聖者をあふがすエホバを求ることを
 せざるなり 然はあれどもエホバもまた智慧あるべしかならず禍害をくだしてその言をひるがへしたまはず
 起てあしきもの家をせめまた不義を行ふ者の助をせめ給はん 三 かのエジプト人は人にして神にあらずその
 馬は肉にして靈にあらずエホバその手をのばしたまはゞ助くるものも蹟きたすけらるゝ者もたふれてみなひとし
 く亡びん 四 エホバ如此われにいひたまふ獅のほえ壯獅の獲物をつかみてほえたげれるとき許多のひつじかひ相呼つど

イザ一・四 撒後二 一・八 二詩四二・四 三詩四二・四 四詩四二・四 五詩四二・四 六詩四二・四 七詩四二・四 八詩四二・四 九詩四二・四 一〇詩四二・四 一一詩四二・四 一二詩四二・四 一三詩四二・四 一四詩四二・四 一五詩四二・四 一六詩四二・四 一七詩四二・四 一八詩四二・四 一九詩四二・四 二〇詩四二・四 二一詩四二・四 二二詩四二・四 二三詩四二・四 二四詩四二・四 二五詩四二・四 二六詩四二・四 二七詩四二・四 二八詩四二・四 二九詩四二・四 三〇詩四二・四 三一詩四二・四 三二詩四二・四 三三詩四二・四 三四詩四二・四 三五詩四二・四 三六詩四二・四 三七詩四二・四 三八詩四二・四 三九詩四二・四 四〇詩四二・四 四一詩四二・四 四二詩四二・四 四三詩四二・四 四四詩四二・四 四五詩四二・四 四六詩四二・四 四七詩四二・四 四八詩四二・四 四九詩四二・四 五〇詩四二・四 五一詩四二・四 五二詩四二・四 五三詩四二・四 五四詩四二・四 五五詩四二・四 五六詩四二・四 五七詩四二・四 五八詩四二・四 五九詩四二・四 六〇詩四二・四 六一詩四二・四 六二詩四二・四 六三詩四二・四 六四詩四二・四 六五詩四二・四 六六詩四二・四 六七詩四二・四 六八詩四二・四 六九詩四二・四 七〇詩四二・四 七一詩四二・四 七二詩四二・四 七三詩四二・四 七四詩四二・四 七五詩四二・四 七六詩四二・四 七七詩四二・四 七八詩四二・四 七九詩四二・四 八〇詩四二・四 八一詩四二・四 八二詩四二・四 八三詩四二・四 八四詩四二・四 八五詩四二・四 八六詩四二・四 八七詩四二・四 八八詩四二・四 八九詩四二・四 九〇詩四二・四 九一詩四二・四 九二詩四二・四 九三詩四二・四 九四詩四二・四 九五詩四二・四 九六詩四二・四 九七詩四二・四 九八詩四二・四 九九詩四二・四 一〇〇詩四二・四

ひてむかひゆくともその聲によりて挫けずその喧嘩しきによりて臆せざるごとく萬軍のエホバくだりてシオン
 山およびその岡にて戦ひたまふべし 鳥の雛をまもるがごとく萬軍のエホバはエルサレムをまもりたまはん
 これを護りてこれをすくひ踰越てこれを援けたまはん 六 イスラエルの子輩よなんぢらさきには甚だしく主にそ
 むけり今たちかへるべし 七 なんぢらおのが手につくりて罪をかしゝ白銀のぐらさう黄金の偶像をその日おの
 おのなげすてん 八 爰にアツスリヤびとは劍にてたふれんされど人のつるぎにあらず劍かれらをほろぼさんされ
 ど世の人のつるぎにあらずかれら劍のまへより逃はしりその壯きものは役丁とならん 九 かれらの磐はおそれ
 によりて逝去りその君たちは旗をみてくじけんこはエホバの御言なりエホバの火はシオンにありエホバの爐は
 エルサレムにあり

第三章

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

茲にひとりの王あり正義をもて統治めその君たちは公平をもて宰さざらん 二 また人ありて風の
 さげどころ暴雨ののがれどころとなり早ける地にある水のながれのごとく倦つかれたる地にある大
 なる岩陰のごとくならん 三 見るものの目はくらます聞ものの耳はかたぶけきをうべし 四 躁がしきもの心
 はさととりて知識をえ吃者の舌はすみやくあざやかに語るをうべし 五 愚かなる者はふたゝび尊貴とよばるゝこ
 となく狡猾なる者はふたゝび大人とよばるゝことなかるべし 六 そは愚なるものは愚なることをかたりその心
 に不義をかもし邪曲をおこなひエホバにむかひて妄なることをかたり飢たる者のこゝろを空しくし渴けるもの
 飲料をつきはてしむ 七 狡猾なるものの用ゐる器はあしゝ彼あしき企圖をまうけ虚偽のことばをもて苦しむ者を
 そこなひ乏しき者のかたること正理なるも尙これを害へり 八 たふとき人はたふとき謀略をまうけ恒にたふとき

事をおこなふ

安逸にをる婦等よおきてわが聲をきけ思煩ひなき女等よわが言に耳を傾けよ 思煩ひなきをんな

たちよ一年あまりの日をすぎて憎きあわてんそは葡萄の收穫むなく果ををさむる期きたるまじければなり

二 やすらかにをる婦等よふるひおそれよおもひわづらひなき者よをのゝきあわてよ衣をぬぎ裸躰になりて腰に

鹿服をまとへ 三 かれら良田のため實りゆたかなる葡萄の樹のために胸をうたん 棘と荊わが民の地にはえ

樂みの邑なるよろこびの家々にもはえん 四 そは殿はすてられにぎはひたる邑はあれすたれオペルと櫓とはとこ

しへに洞穴となり野の驢馬のたのしむところ羊のむれの草はむところとなるべし 五 されど遂には靈うへより

我儕にそゝぎて荒野はよき田となり良田は林のごとく見ゆるとききたらん

六 そのとき公平はあれのにすみ正義はよき田にをらん かくて正義のいさをは平和せいぎのむすぶ果はと

こしへの平穩とやすきなり 七 わが民はへいわの家ををり思ひわづらひなき住所にをり安らかなる休息所にをら

八 されどまづ覆ふりて林くだけ邑もことごとくたふるべし 九 なんぢらもろもろの水のほとりに種をおろし

牛および驢馬の足をはなちおく者はさいはひなり

禍ひなるかななんぢ害はれざるに人をそこなひ欺かれざるに人をあざむけりなんぢが害ふこと

終らば汝そこなはれなんぢが欺くことはてなば汝あざむかるべし 二 エホバよわれらを恵みたまへ

われらなんぢを俟望めりなんぢ朝ごとにわれらの臂となりまた患難のときにわれらの救となりたまへ 三 なり

とゞろく聲によりてもろもろの民にげはしりなんぢの起たまふによりてもろもろの國はちりうせぬ 四 蝨賊の

第三章

イザ六・一 二二・二八 ト雅三・一八
ロ雅三・一三 何九 二二・二八 ト雅三・一八
ホ詩一〇四・三〇 耳 二二・二八 ト雅三・一八
ハ詩二二・二二 二二・二八 ト雅三・一八
ニ雅二七・一〇 二二・二八 ト雅三・一八
ホ詩一〇四・三〇 耳 二二・二八 ト雅三・一八

ものをはみつくすがごとく人なんぢらの財をとり盡さんまた蝗のとびつどふがごとく人なんぢらの財にとびつど

ふべし 五 エホバは最たかし高處にすみたまふなりエホバはシオンに公正と正義とを充せたまひたり 六 なん

ぢの代はかたくたち救と智慧と知識とはゆたかにあらんエホバをおそるゝは國の實なり

七 視よかれらの勇士は外にありてさけび和をもとむる使者はいたく哭く 八 大路あれすたれて旅客たえ敵は

契約をやぶり諸邑をなみし人をものゝかずとせず 九 地はうれへおとろへレバノンは恥らひて枯れシャロンは

アラバのごとくなりバシヤンとカルメルとはその葉をおとす 一〇 エホバ言給はくわれ今おきん今たゝん今みづか

ら高くせん 二 なんぢらの孕むところは糞のごとくなんぢらの生ところは藁のごとしなんぢらの氣息は火と

なりてなんぢらを食ひつくさん 三 もろもろの民はやかれて灰のごとくなり荊のきられて火にもやされたるが如

くならん

四 なんぢら遠にあるものよわが行ひしことをきけなんぢら近にあるものよわが能力をしれ 五 シオンの罪人

はおそる戦慄はよこしまなる者にのぞめりわれらの中たれか焼つくす火にとゞまることを得んや我儕のうち誰か

とこしへに焼るなかに止るをえんや 六 義をおこなふもの直をかたるもの虐げてえたる利をいとひすつるもの

手をふりて賄賂をとらざるもの耳をふさぎて血をながす謀略をきかざるもの目をとぢて悪をみざる者 七 かゝる

人はたかき處にすみかたき磐はその櫓となりその糧はあたへられその水はともしきことなからん

八 なんぢの目はうるはしき状なる王を見とほくひろき國をみるべし 九 なんぢの心はかの懼しかりしことど

もを思ひいでん會計せし者はいづくにありや貢をはかりし者はいづくにありや櫓をかぞへし者はいづくにありや

七 のむことを得べし 一七 遂には我きたりて汝等をほかの國にたづさへゆかんその國はなんぢの國のごとき國にして
 一八 穀物ぶだう酒パンおよび葡萄園あり 一八 おそらくはヒゼキヤなんぢらに説てエホバわれらを救ふべしといはん
 一九 然どもろもろの國の神等のなかにその國をアツスリヤ王の手より救へる者ありしや 一九 ハマテ、アルバデの
 二〇 神等いづこにありやセバルワイムの神等いづこにありや又わが手よりサマリヤを救出し、神ありや 二〇 これら
 二一 の國のもろもろの神のなかに誰かその國をわが手よりすくひいだし、者ありやさればエホバも何でわが手より
 二二 エルサレムを救ひいだし得んと 二二
 二三 如此ありければ民は黙して一言をもこたへざりきそは之にこたふるなかれとの王のおほせありつればなり
 二四 そのときヒルキヤの子なる家司エリアキム書記セブナおよびアサフの子なる史官ヨアころもを裂てヒゼキヤ
 二五 にゆき之にラブシヤケの言をつげたり 二五

第三章

一 ヒゼキヤ王これをきゝてその衣をさき鹿衣をまとひてエホバの家にゆき 一 家司エリアキム書記
 二 セブナおよび祭司のなかの長老等をして皆あらたへをまとはせてアモツの子預言者イザヤのもとに
 三 ゆかしむ 三 かれらイザヤにいひけるはヒゼキヤ如此いへりけふは患難と責と辱かしめの日なりそは子うまれん
 四 として之をうみいだすの力なし 四 なんぢの神エホバあるひはラブシヤケがもろもろの言をきゝたまはん彼は
 五 その君アツスリヤ王につかはされて活る神をそしれりなんぢの神エホバその言をきゝて或はせめたまふならん
 六 されば請なんぢこの遺れるもののために祈禱をさゝげよと 六
 七 かくてヒゼキヤ王の諸僕イザヤにいたる 七 イザヤかれらに言けるはなんぢらの君につげよエホバ斯い
 八 王下一九・二 四四九二・三 八四九二・八

七 ひたまへり曰くアツスリヤ王のしもべら我をのゝしりけがせりなんぢらその聞しことばによりて懼るゝなかれ
 八 視よわれかれが意をうごかすべければ一つの風聲をきゝておのが國にかへらんかれをその國にて劍にたふれ
 九 しむべし 九
 一〇 爰にラブシヤケはアツスリヤ王がラキシを離れさりしときゝて歸りけるとき際しも王はリブナを攻をれり
 一一 このときエテオビアの王テルハカの事についてきけり云くかれいでて汝とたゝかふべしとこのことをきゝて
 一二 使者をヒゼキヤに遣していふ 一二 なんぢらユダの王ヒゼキヤにつけて如此いへなんぢが頼める神なんぢを欺き
 一三 てエルサレムはアツスリヤ王の手にわたされじといふを聽ことなかれ 一三 視よアツスリヤの王等もろもろの國に
 一四 いかなることをおこなひ如何してこれを悉くほろぼしゝかを汝きゝしならんされば汝すくはるゝことを得んや
 一五 わが先祖たちの滅ぼしゝゴザン、ハラン、レゼフおよびテラサルなるエデンの族など此等のくにぐにの神はそ
 一六 の國をすくひたりしや 一六 ハマテの王アルバデの王セバルワイムの都の王ヘナの王およびイワの王はいづこにあ
 一七 りやと 一七

一八 ヒゼキヤつかひの手より書をうけて之を讀りしかしてヒゼキヤ、エホバの宮にのほりゆきエホバの前にこ
 一九 のふみを展ぶ 一九 ヒゼキヤ、エホバに祈ていひけるは 一九 ケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバ、イスラエルの
 二〇 神よたゞ汝のみ地のうへなるよろづの國の神なりなんぢは天地をつくりたまへり 二〇 エホバよ耳をかたむけて
 二一 聽たまへエホバよ目をひらきて視たまへセナケリフ使者して活る神をそしらしめし言をことごとくきゝたまへ
 二二 エホバよ實にアツスリヤの王等もろもろの國民とその地とをあらし毀ち 二二 かれらの神たちを火になげい
 二三 れたりこれらのものは神にあらず人の手の工にしてあるひは木あるひは石なり斯るがゆゑに滅ぼされたり
 二四 一 二二二三

三〇 さればわれらの神エホバよ今われらをアツスリヤ王の手より救ひいだして地のもろもろの國にたゞ汝のみエホバなることを知しめたまへ

三二 こゝにアモツの子イザヤ人をつかはしてヒゼキヤにいはせけるはイスラエルの神エホバかくいひたまふ汝はアツスリヤ王セナケリブのことにつきて我にいのれり 三三 エホバが彼のことにつきて語りたまへるみことば

は是なりいはくシオンの處女はなんぢを侮りなんぢをあざけりエルサレムの女子はなんぢの背後より頭をふれり 三三 汝がそしりかつ罵れるものは誰ぞなんぢが聲をあけ目をたく向てさからひたるものはたれぞイスラエルの聖者ならずや 三四 なんぢその使者によりて主をそしりていふ我はおほくの戰車をひきみて山々のいたゞきに登

りレバノンの奥にまでいりぬ我はたけたかき香柏とうるはしき松樹とをきりまたその境なるたかき處にゆき映たる地の林にゆかん 三五 我は井をほりて水のみたりわれは足踏をもてエジプトの河々をからさんと

三六 なんぢ聞ずやこれらのことはわが昔しよりなす所にしへの日よりさだめし所なり今なんぢがこの堅城をこぼちあらして石堆となすも亦わがきたらしし所なり 三七 そのなかの民はちから弱くをのゝきて恥をいだき野草のごとく青き菜のごとく屋蓋の草のごとく未だそだたざる苗のごとし 三八 我なんぢが居ること出入すること

又われにむかひて怒りさげべることをしる 三九 なんぢが我にむかひて怒りさげべると汝がほこれる言とわが耳にいりたれば我なんぢの鼻に環をはめ汝のくちびるに鑢をつけて汝がきたれる路よりかへらしめん 四〇 ヒゼキヤよ我がなんぢにたまふ徴はこれなりなんぢら今年は落穂より生たるものをくらひ明年は粟生より出たるものを食はん三年にあたりては種ことをなし收ことをなし葡萄ぞのを作りてその果をくらふべし 四一 ユダ

イザ三〇・二八 結三

口王下一九・三一 九・七

ハ王下二〇・六 三三・二二四

ト尼二二・二四 三三・二二四

チ王下二〇・八 七

二一

三三 家ののがれて遺れる者はふたゝび下は根をはり上は果を結ぶべし 三三 是は遺るものはエルサレムよりいで脱るものはシオンの山よりいづるなり萬軍のエホバの熱心これを成たまふべし

三三 この故にエホバアツスリヤの王については如此いひたまふ彼はこの城にいらすこゝに箭をはなたす盾を城のまへにならべす壘をきづきて攻ることなし 三四 かれはそのきたりし道よりかへりてこの城にいらす 三五 我

おのれの故によりて僕ダビデの故によりてこの城をまもりこの城をすくはんこれエホバ宣給るなり 三六 エホバの使者いできたりアツスリヤの陣營のなかにて十八萬五千人をうちころせり早晨におきいでて見ればみな死てかばねとなれり 三七 アツスリヤ王セナケリブ起てかへりゆきニネベにとゞまる 三八 一日おのが神ニス

ロクのみやにて禮拜をなし居しにその子アデランメルクとシャレゼルと劍をもて彼をころし而してアララテの地にげゆけりかれが子エサルハドンつぎて王となりぬ

第三章

一 そのころヒゼキヤやみて死んとせしにアモツの子預言者イザヤきたりて彼にいふエホバ如此いひたまはくなんぢ家に遺言をとゞめよ汝しにて活ることあたはざればなり 二 爰にヒゼキヤ面を壁にむけてエホバに祈りいひけるは 三 あゝエホバよ願くはわがなんぢの前に眞實をもて 四 心をもちてあゆみなんぢの目によきことを行ひたるをおもひいでたまへ斯てヒゼキヤ甚くなきぬ 五 エホバの言イザヤにのぞみて

曰く 六 なんぢ往てヒゼキヤにいへなんぢの祖ダビデの神エホバかくいひたまはく我なんぢの禱告をきよなんぢの涙をみたり我なんぢの齡を十五年ましくはへ 七 且なんぢとこの城とを救ひてアツスリヤわうの手をのがれしめん又われこの城をまもるべし 八 エホバ語りたまひたる此事を成たまふ證にこの徴をなんぢに賜ふ 九 視よ

われアハズの日晷にすゝみたる日影を十度しりぞかしめんといひければ乃ちひばかりにすゝみたる日影十度しり

ぞきぬ ユダの王ヒゼキヤ病にかゝりてその病のいえしのち記し書は左のごとし 我いへりわが齡ひの全盛
 のとき陰府の門にいりわが餘年をうしなはんと 我いへりわれ再びエホバを見奉ることあらじ再びいける
 ものの地にてエホバを見奉ることあらじわれは無ものの中にいりてふたゞび人を見ることあらじ わが住所
 はうつされて牧人の幕屋をとりさるごとくに我をはなるわがいのちは織工の布をまきをはりて機より剪はなす
 ごとくならんなんぢ朝夕のあひだに我をたえしめたまはん われは天明におよぶまで己をおさへてしづめ
 たり主は獅のごとくに我もろもろの骨を碎きたまふなんぢ朝夕の間にわれを絶しめたまはん われは燕の
 ごとく鶴のごとくに哀みなき鳩のごとくにうめきわが眼はうへを視ておとろふエホバよわれは迫りくるしめら
 る願くはわが中保となりたまへ 主はわれともいひ且そのごとくみづから成たまへりわれ何をいふべきか
 わが世にある間わが靈魂の苦しめる故によりて慎みてゆかん 主よこれらの事によりて人は活るなりわが靈魂
 のいのちも全くこれらの事によるなり願くはわれを醫しわれを活したまへ 視よわれに甚しき艱苦をあたへ
 たまへるは我に平安をえしめんがためなり汝わがたましひを愛して滅亡の穴をまぬかれしめ給へりそはわが罪を
 ことごとく背後にすてたまへり 陰府はなんぢに感謝せず死はなんぢを讚美せず墓にくだる者はなんぢの誠實
 をのぞまず 唯一けるもののみ活るものこそ汝にかんしやするなれわが今日かんしやするがごとし父はなんぢ
 の誠實をその子にしらしめん エホバ我を救ひたまはんわれら世にあらんかぎりエホバのいへにて琴をひき
 わが歌をうたはん

イ詩二七・二二—二一 一五九・九—一〇 一七 傳九・一〇
 六・九 三 伯七・六 六 詩六・五 三〇・九 申四・九六・七 詩 七八・三—四
 ト王下二〇・七 又代下三三・三一 又代下三三・三一
 九 耶二〇・五 一 耶二〇・五 一 耶二〇・五 一 耶二〇・五 一
 耶二〇・五 一 耶二〇・五 一 耶二〇・五 一 耶二〇・五 一

イザヤいへらく無花果の一團をとりきたりて腫物のうへにつけよ王かならずいえん ヒゼキヤも亦いへらくわがエホバの家にのぼることにつきては何の兆あらんか

第三章

そのころバラダンの子バビロン王メロダクバラダン、ヒゼキヤが病をうれへて愈しことをきけ
 れば書と禮物とおくれり ヒゼキヤその使者のきたるによりて喜びこれに財物 金銀 香料た
 ふとき油ををさめたる家およびすべての軍器ををさめたる家また庫のなかなる物をことごとく見すおほよそヒ
 ゼキヤのいへの裏にあるものと全國のうちにあるものと見せざるものは一もあらざりき ことばに預言者イザヤ、
 ヒゼキヤ王のもとに來りていひけるはこの人々はなにをいひしや何處よりなんぢのもとに來りしやヒゼキヤ曰
 けるはかれらはとほき國よりバビロンより我にきたれり イザヤいふ彼等はなんぢの家にてなにを見たりし
 やヒゼキヤ答ふかれらはわが家にあるものを皆みたり又わが庫のなかにあるものは一つをもかれらに見せざる
 ものなかりき イザヤ、ヒゼキヤにいふなんぢ萬軍のエホバの言をきけ みよ日きたらんなんぢの家のも
 なんぢの列祖がけふまで蓄へたるものは皆バビロンにたづさへゆかれて遺るもの一もなかるべし是はエホバの
 みことばなり なんぢの身より生れいでん者もとらはれ寺人とせられてバビロン王の宮のうちにあらん
 ゼキヤ、イザヤにいひけるは汝がかたるエホバのみことばは善しまた云わが世にあるほどは太平と眞實とあるべ
 しと

第四章

なぢんらの神いひたまはくなくさめよ汝等わが民をなくさめよ 懇ろにエルサレムに語り之に
 よばはり告よその服役の期すでに終りその咎すでに赦されたりそのもろもろの罪によりてエホバの
 手よりうけしところは倍したりと

よばはるものの聲きこゆ云くなんぢら野にてエホバの途をそなへ沙漠にわれらの神の大路をなほくせよ
もろもろの谷はたかくもろもろの山と岡とはひくくせられ曲りたるはなほく崎嶇はたひらかにせらるべし
斯てエホバの榮光あらはれ人みな共にこれを見んこはエホバの口より語りたまへるなり

聲きこゆ云くよばはれ答へていふ何とよばはるべきかいはく人はみな草なりその榮華はすべて野の花の
ごとし 草はかれ花はしほむエホバの息そのうへに吹ければなり實に民はくさなり 草はかれ花はしほむ
然どわれらの神のことは永遠にたゞん

よき音信をシオンにつたふる者よなんぢ高山にのぼれ嘉おとづれをエルサレムにつたふる者よなんぢ強く
聲をあげよこゑを揚ておそるゝなかれユダのもろもろの邑につげよなんぢらの神きたり給へりと みよ主エホ
バ能力をもちて來りたまはんその臂は統治めたまはん賞賜はその手にありはたらきの値はその前にあり 主は
牧者のごとくその群をやしなひその臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたづさへ乳をふくまする者をやは
らかに導きたまはん

たれか掌 心をもてもろもろの水をはかり指をのばして天をはかりまた地の塵を量器にもり天秤をもても
ろもろの山をはかり權衡をもてもろもろの岡をはかりしや 誰かエホバの靈をみちびきその議士となりて教し
や エホバは誰とともに議りたまひしやたれかエホバを聴くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたへ明通
のみちを示したりしや 視よもろもろの國民は桶のひとしづくのごとく權衡のちりのごとくに思ひたまふ島

島はたちのぼる塵埃のごとし レバノンには柴にたらずそのなかの獸は燔祭にたらず エホバの前にはもろ
もろの國民みななきにひとしエホバはかれらを無もののごとく空きもののごとく思ひたまふ
然ばなんぢら誰をもて神にくらべいかなる肖像をもて神にたぐふか 偶像はたくみ鑄てつくり金工こが
ねをもて之をおほひ白銀をもて之がために鏈をつくれり かゝる寶物をそなへえざる貧しきものは朽まじき木
をえらみ良匠をもとめてうごくことなき像をたゝしむ なんぢら知ざるかなんぢら聞ざるか始よりなんぢらに
傳へざりしかなんぢらは地の基をおきしときより悟らざりしか エホバは地のはるか上にすわり地にすむも
のを蝗のごとく視たまふおほぼらを薄絹のごとく布きこれを住ふべき幕屋のごとくはりたまふ 又もろもろの
君をなくならしめ地の審士をむなくせしむ かれらは僅かに植られ僅かに播れその幹わづかに地に根ざし
しに神そのうへを吹たまへば即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし 聖者いひ給はくさらばなんぢら
誰をもて我にくらべ我にたぐふか なんぢら眼をあげて高をみよたれか此等のものを創造せしやをおもへ主
は數をしらべてその萬象をひきいだしおのおのの名をよびたまふ主のいきほひ大なりその力のつよきがゆるに
一も缺ることなし

ヤコブよなんぢ何故にわが途はエホバにかくれたりといふやイスラエルよ汝なにゆるにわが訟はわが神
の前をすぎされりとかたるや 汝しらざるか聞ざるかエホバはとこしへの神地のはての創造者にして倦たまふ
ことなくまた疲れたまふことなくその聰明こと測りがたし 疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには
強きをまし加へたまふ 年少きものもつかれてうみ壯なるものも衰へおとろふ 然はあれどエホバを俟望

二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇

二四 はせざりき 二四 なんぢは銀貨をもて我がために菖蒲をかはす犠牲のあぶらをもて我をあかしめす反てなんぢの
罪の荷をわれに負せなんぢの邪曲にて我をわづらはせたり

二五 われこそ我みづからの故によりてなんぢの咎をけし汝のつみを心にとめざるなれ 二六 なんぢその是なるを
あらはさんがために己が事をのべて我に記念せしめよわれら相共にあげつらふべし 二七 なんぢの遠祖つみを
をかした汝のをしへの師われにそむけり 二八 この故にわれ聖所の長たちを汚さしめヤコブを誑はしめイスラエルを
のゝしらしめん

第四章

一 されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ 二 なんぢを創造しなんぢを胎内につく
り又なんぢを助くるエホバ如此いひたまふわがしもべヤコブよわが撰みたるエシユルンよおそるゝ
なかれ 三 われ渴けるものに水をそゝぎ乾たる地に流をそゝぎわが靈をなんぢの子輩にそゝぎわが恩恵をなんぢ
の裔にあたふべければなり 四 斯てかれらは草のなかにて川のほとりの柳のごとく生そだつべし 五 ある人は
いふ我はエホバのものなりとある人はヤコブの名をとなへんある人はエホバの有なりと手にしるしてイスラエル
の名をなのらん

六 エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなふもの萬軍のエホバ如此いひたまふわれは始なりわれは終な
りわれの外に神あることなし 我いにしへの民をまうけしより以來たれかわれのごとく後事をしめし又つげ
又わが前にいひつらねんや試みに成んとすること來らんとすることを告よ 八 なんぢら懼るゝなかれ懼くなかれ

イザ一・二四 馬二・ 徒三・一九 詩七九四 耶二四 三〇・一〇、四六・ 二八 約七・三八 一一二 歌一・八、一
一七 一七 二一 二八 耶三一 九 伯九・二二 二七・二八 徒二・二八 七、二二・一三
口結三六・二二 二三四 八・一三 八 賽四三・一、二四、 七 賽四一・四、二二、
ハ 賽四四・二二、四八 ホ 賽四七・六 賽二・ 一 賽四一・八、四三 三 申三三・二五 四四・二四 四五・二一
九 耶五〇・二〇 二六・七 二 四四・二二、耶 又 賽三五・七 耳二・ 七 賽四一・四、四八、

カ 賽四一・二二 三二・三九 申前二 レ 賽四一・二四、二九 一八 一八 賽四〇・一九、四一 四 賽四二・一
ヨ 賽四三・一〇、二二 三二 申後二・三 三 詩一〇五、四 哈二・ 二九、四二、一七、 六 耶一〇・三 四 賽四六・八
タ 申四・三五、三九、 二 賽四五・五 三 耶一〇・五 二 哈二・ 二九、四二、一七、 六 耶一〇・三 四 賽四六・八

我いにしへより聞せたるにあらすや告しにあらすやなんぢらはわが證人なりわれのほか神あらんや我のほかには
磐あらずわれその一つだに知ことなし

九 偶像をつくる者はみな空しくかれらが慕ふところのものは益なしその證をするものは見ことなく知こと
なし斯るがゆゑに恥をうくべし 一〇 たれか神をつくり又えきなき偶像を鑄たりしや 二 視よその伴侶はみなはぢ
んその匠工らは人なりかれら皆あつまりて立ときはおそれるもともに恥るなるべし

二 鐵匠は斧をつくるに炭の火をもてこれをやき鑄もてこれを鍛へつよき腕をもてこれをうちかたむ飢れば
力おとろへ水をのまさればつかればつべし 三 木匠はすみなはをひきはり朱にてゑがき鋸にてけづり文回をもて
畫き之を人の形にかたどり人の美しき容にしたがひて造り而して家のうちに安置す 四 あるひは香柏をきりあ
るひは榲をとりあるひは樞をとり或ははやしの樹のなかにて一をえらびあるひは杉をうゑ雨をえて長たしむ

五 而して人これを薪となし之をもておのが身をあたゝめ又これを燃してパンをやき又これを神につくりてをが
み偶像につくりてその前にひれふす 六 その半は火にもやしその半は肉をにて食ひあるひは肉をあぶりてくひ
あきまた身をあたゝめていふあゝ我あたゝまれりわれ熱きをおほゆ 七 斯てその餘をもて神につくり偶像につく
りてその前にひれふし之ををがみ之にいのりていふなんぢは吾神なり我をすくへと

八 これらの人は知ことなく悟ることなしその眼ふさがりて見えすその心とごてあきらかならず 九 心のうち
に思ふことをせず智識なく明悟なきがゆゑに我そのなかばを火にもやしその炭火のうへにパンをやき肉をあぶり
てくらひその木のあまりをもて我いかで憎むべきものを作るべけんや我いかで木のはしくれに俯伏すことをせん

二〇 やといふ者もなし 二〇 かくる人は灰をくらひ迷へる心にまどはされて己がたましひを救あたはずまたわが右手に
 二一 一つはりあるにあらずやとおもはざるなり
 二二 ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ汝はわが僕なり我なんぢを造れりなんぢわが僕なりイスラ
 二三 エルよ我はなんぢを忘れじ 二三 我なんぢの愆を雲のごとくに消しなんぢの罪を霧のごとくにちらせりなんぢ我に
 二四 かへれ我なんぢを贖ひたればなり 二四 天ようたうたへエホバこのことを成たまへり下なる地よばはれもろもろ
 二五 の山よ林およびその中のもろもろの木よこゑを發ちてうたふべしエホバはヤコブを贖へりイスラエルのうちに
 二六 榮光をあらはし給はん
 二七 なんぢを贖ひなんぢを胎内につくれるエホバかく言たまふ我はエホバなり我よろづのものを創造した
 二八 我のみ天をのべみづから地をひらき 二八 一つはるもの豫兆をむなくし卜者くるはせ智者をうしろに
 二九 退けてその知識をおろかならしむ 二九 われわが僕のことばを遂しめわが使者のはかりごとを成しめエルサレム
 三〇 については民また住はんといひユダのもろもろの邑については重ねて建らるべし我その荒廢たるところを舊に
 三一 かへさんといふ 三一 また淵に命ずかわけ我なんぢのもろもろの川をほさんと 三一 又クロスについては彼はわが
 三二 牧者すべてわが好むところを成しむる者なりといひエルサレムについてはかさねて建られその宮の基すゑられん
 三三 といふ

第五章

一 われエホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろもろの國をそのまへに降らしめもろもろの王
 二 の腰をとき扉をその前にひらかせて門をとづるものなからしめん 二 われ汝のまへにゆきて崎嶇を

一 何四・二二 彼前一・一八、一九 一〇、四九・三三 へ賽四三・一四、四四 二二、五一・一三
 二 賽四三・一四、一五 二 賽四三・一四、一五 二 賽四三・一四、一五 二 賽四三・一四、一五
 三 賽四三・一四、一五 三 賽四三・一四、一五 三 賽四三・一四、一五 三 賽四三・一四、一五
 四 賽四三・一四、一五 四 賽四三・一四、一五 四 賽四三・一四、一五 四 賽四三・一四、一五
 五 賽四三・一四、一五 五 賽四三・一四、一五 五 賽四三・一四、一五 五 賽四三・一四、一五
 六 賽四三・一四、一五 六 賽四三・一四、一五 六 賽四三・一四、一五 六 賽四三・一四、一五
 七 賽四三・一四、一五 七 賽四三・一四、一五 七 賽四三・一四、一五 七 賽四三・一四、一五
 八 賽四三・一四、一五 八 賽四三・一四、一五 八 賽四三・一四、一五 八 賽四三・一四、一五
 九 賽四三・一四、一五 九 賽四三・一四、一五 九 賽四三・一四、一五 九 賽四三・一四、一五
 一〇 賽四三・一四、一五 一〇 賽四三・一四、一五 一〇 賽四三・一四、一五 一〇 賽四三・一四、一五
 一一 賽四三・一四、一五 一一 賽四三・一四、一五 一一 賽四三・一四、一五 一一 賽四三・一四、一五
 一二 賽四三・一四、一五 一二 賽四三・一四、一五 一二 賽四三・一四、一五 一二 賽四三・一四、一五
 一三 賽四三・一四、一五 一三 賽四三・一四、一五 一三 賽四三・一四、一五 一三 賽四三・一四、一五
 一四 賽四三・一四、一五 一四 賽四三・一四、一五 一四 賽四三・一四、一五 一四 賽四三・一四、一五
 一五 賽四三・一四、一五 一五 賽四三・一四、一五 一五 賽四三・一四、一五 一五 賽四三・一四、一五
 一六 賽四三・一四、一五 一六 賽四三・一四、一五 一六 賽四三・一四、一五 一六 賽四三・一四、一五
 一七 賽四三・一四、一五 一七 賽四三・一四、一五 一七 賽四三・一四、一五 一七 賽四三・一四、一五
 一八 賽四三・一四、一五 一八 賽四三・一四、一五 一八 賽四三・一四、一五 一八 賽四三・一四、一五
 一九 賽四三・一四、一五 一九 賽四三・一四、一五 一九 賽四三・一四、一五 一九 賽四三・一四、一五
 二〇 賽四三・一四、一五 二〇 賽四三・一四、一五 二〇 賽四三・一四、一五 二〇 賽四三・一四、一五
 二一 賽四三・一四、一五 二一 賽四三・一四、一五 二一 賽四三・一四、一五 二一 賽四三・一四、一五
 二二 賽四三・一四、一五 二二 賽四三・一四、一五 二二 賽四三・一四、一五 二二 賽四三・一四、一五
 二三 賽四三・一四、一五 二三 賽四三・一四、一五 二三 賽四三・一四、一五 二三 賽四三・一四、一五
 二四 賽四三・一四、一五 二四 賽四三・一四、一五 二四 賽四三・一四、一五 二四 賽四三・一四、一五
 二五 賽四三・一四、一五 二五 賽四三・一四、一五 二五 賽四三・一四、一五 二五 賽四三・一四、一五
 二六 賽四三・一四、一五 二六 賽四三・一四、一五 二六 賽四三・一四、一五 二六 賽四三・一四、一五
 二七 賽四三・一四、一五 二七 賽四三・一四、一五 二七 賽四三・一四、一五 二七 賽四三・一四、一五
 二八 賽四三・一四、一五 二八 賽四三・一四、一五 二八 賽四三・一四、一五 二八 賽四三・一四、一五
 二九 賽四三・一四、一五 二九 賽四三・一四、一五 二九 賽四三・一四、一五 二九 賽四三・一四、一五
 三〇 賽四三・一四、一五 三〇 賽四三・一四、一五 三〇 賽四三・一四、一五 三〇 賽四三・一四、一五
 三一 賽四三・一四、一五 三一 賽四三・一四、一五 三一 賽四三・一四、一五 三一 賽四三・一四、一五
 三二 賽四三・一四、一五 三二 賽四三・一四、一五 三二 賽四三・一四、一五 三二 賽四三・一四、一五
 三三 賽四三・一四、一五 三三 賽四三・一四、一五 三三 賽四三・一四、一五 三三 賽四三・一四、一五
 三四 賽四三・一四、一五 三四 賽四三・一四、一五 三四 賽四三・一四、一五 三四 賽四三・一四、一五
 三五 賽四三・一四、一五 三五 賽四三・一四、一五 三五 賽四三・一四、一五 三五 賽四三・一四、一五
 三六 賽四三・一四、一五 三六 賽四三・一四、一五 三六 賽四三・一四、一五 三六 賽四三・一四、一五
 三七 賽四三・一四、一五 三七 賽四三・一四、一五 三七 賽四三・一四、一五 三七 賽四三・一四、一五
 三八 賽四三・一四、一五 三八 賽四三・一四、一五 三八 賽四三・一四、一五 三八 賽四三・一四、一五
 三九 賽四三・一四、一五 三九 賽四三・一四、一五 三九 賽四三・一四、一五 三九 賽四三・一四、一五
 四〇 賽四三・一四、一五 四〇 賽四三・一四、一五 四〇 賽四三・一四、一五 四〇 賽四三・一四、一五
 四一 賽四三・一四、一五 四一 賽四三・一四、一五 四一 賽四三・一四、一五 四一 賽四三・一四、一五
 四二 賽四三・一四、一五 四二 賽四三・一四、一五 四二 賽四三・一四、一五 四二 賽四三・一四、一五
 四三 賽四三・一四、一五 四三 賽四三・一四、一五 四三 賽四三・一四、一五 四三 賽四三・一四、一五
 四四 賽四三・一四、一五 四四 賽四三・一四、一五 四四 賽四三・一四、一五 四四 賽四三・一四、一五
 四五 賽四三・一四、一五 四五 賽四三・一四、一五 四五 賽四三・一四、一五 四五 賽四三・一四、一五
 四六 賽四三・一四、一五 四六 賽四三・一四、一五 四六 賽四三・一四、一五 四六 賽四三・一四、一五
 四七 賽四三・一四、一五 四七 賽四三・一四、一五 四七 賽四三・一四、一五 四七 賽四三・一四、一五
 四八 賽四三・一四、一五 四八 賽四三・一四、一五 四八 賽四三・一四、一五 四八 賽四三・一四、一五
 四九 賽四三・一四、一五 四九 賽四三・一四、一五 四九 賽四三・一四、一五 四九 賽四三・一四、一五
 五〇 賽四三・一四、一五 五〇 賽四三・一四、一五 五〇 賽四三・一四、一五 五〇 賽四三・一四、一五
 五一 賽四三・一四、一五 五一 賽四三・一四、一五 五一 賽四三・一四、一五 五一 賽四三・一四、一五
 五二 賽四三・一四、一五 五二 賽四三・一四、一五 五二 賽四三・一四、一五 五二 賽四三・一四、一五
 五三 賽四三・一四、一五 五三 賽四三・一四、一五 五三 賽四三・一四、一五 五三 賽四三・一四、一五
 五四 賽四三・一四、一五 五四 賽四三・一四、一五 五四 賽四三・一四、一五 五四 賽四三・一四、一五
 五五 賽四三・一四、一五 五五 賽四三・一四、一五 五五 賽四三・一四、一五 五五 賽四三・一四、一五
 五六 賽四三・一四、一五 五六 賽四三・一四、一五 五六 賽四三・一四、一五 五六 賽四三・一四、一五
 五七 賽四三・一四、一五 五七 賽四三・一四、一五 五七 賽四三・一四、一五 五七 賽四三・一四、一五
 五八 賽四三・一四、一五 五八 賽四三・一四、一五 五八 賽四三・一四、一五 五八 賽四三・一四、一五
 五九 賽四三・一四、一五 五九 賽四三・一四、一五 五九 賽四三・一四、一五 五九 賽四三・一四、一五
 六〇 賽四三・一四、一五 六〇 賽四三・一四、一五 六〇 賽四三・一四、一五 六〇 賽四三・一四、一五
 六一 賽四三・一四、一五 六一 賽四三・一四、一五 六一 賽四三・一四、一五 六一 賽四三・一四、一五
 六二 賽四三・一四、一五 六二 賽四三・一四、一五 六二 賽四三・一四、一五 六二 賽四三・一四、一五
 六三 賽四三・一四、一五 六三 賽四三・一四、一五 六三 賽四三・一四、一五 六三 賽四三・一四、一五
 六四 賽四三・一四、一五 六四 賽四三・一四、一五 六四 賽四三・一四、一五 六四 賽四三・一四、一五
 六五 賽四三・一四、一五 六五 賽四三・一四、一五 六五 賽四三・一四、一五 六五 賽四三・一四、一五
 六六 賽四三・一四、一五 六六 賽四三・一四、一五 六六 賽四三・一四、一五 六六 賽四三・一四、一五
 六七 賽四三・一四、一五 六七 賽四三・一四、一五 六七 賽四三・一四、一五 六七 賽四三・一四、一五
 六八 賽四三・一四、一五 六八 賽四三・一四、一五 六八 賽四三・一四、一五 六八 賽四三・一四、一五
 六九 賽四三・一四、一五 六九 賽四三・一四、一五 六九 賽四三・一四、一五 六九 賽四三・一四、一五
 七〇 賽四三・一四、一五 七〇 賽四三・一四、一五 七〇 賽四三・一四、一五 七〇 賽四三・一四、一五
 七一 賽四三・一四、一五 七一 賽四三・一四、一五 七一 賽四三・一四、一五 七一 賽四三・一四、一五
 七二 賽四三・一四、一五 七二 賽四三・一四、一五 七二 賽四三・一四、一五 七二 賽四三・一四、一五
 七三 賽四三・一四、一五 七三 賽四三・一四、一五 七三 賽四三・一四、一五 七三 賽四三・一四、一五
 七四 賽四三・一四、一五 七四 賽四三・一四、一五 七四 賽四三・一四、一五 七四 賽四三・一四、一五
 七五 賽四三・一四、一五 七五 賽四三・一四、一五 七五 賽四三・一四、一五 七五 賽四三・一四、一五
 七六 賽四三・一四、一五 七六 賽四三・一四、一五 七六 賽四三・一四、一五 七六 賽四三・一四、一五
 七七 賽四三・一四、一五 七七 賽四三・一四、一五 七七 賽四三・一四、一五 七七 賽四三・一四、一五
 七八 賽四三・一四、一五 七八 賽四三・一四、一五 七八 賽四三・一四、一五 七八 賽四三・一四、一五
 七九 賽四三・一四、一五 七九 賽四三・一四、一五 七九 賽四三・一四、一五 七九 賽四三・一四、一五
 八〇 賽四三・一四、一五 八〇 賽四三・一四、一五 八〇 賽四三・一四、一五 八〇 賽四三・一四、一五
 八一 賽四三・一四、一五 八一 賽四三・一四、一五 八一 賽四三・一四、一五 八一 賽四三・一四、一五
 八二 賽四三・一四、一五 八二 賽四三・一四、一五 八二 賽四三・一四、一五 八二 賽四三・一四、一五
 八三 賽四三・一四、一五 八三 賽四三・一四、一五 八三 賽四三・一四、一五 八三 賽四三・一四、一五
 八四 賽四三・一四、一五 八四 賽四三・一四、一五 八四 賽四三・一四、一五 八四 賽四三・一四、一五
 八五 賽四三・一四、一五 八五 賽四三・一四、一五 八五 賽四三・一四、一五 八五 賽四三・一四、一五
 八六 賽四三・一四、一五 八六 賽四三・一四、一五 八六 賽四三・一四、一五 八六 賽四三・一四、一五
 八七 賽四三・一四、一五 八七 賽四三・一四、一五 八七 賽四三・一四、一五 八七 賽四三・一四、一五
 八八 賽四三・一四、一五 八八 賽四三・一四、一五 八八 賽四三・一四、一五 八八 賽四三・一四、一五
 八九 賽四三・一四、一五 八九 賽四三・一四、一五 八九 賽四三・一四、一五 八九 賽四三・一四、一五
 九〇 賽四三・一四、一五 九〇 賽四三・一四、一五 九〇 賽四三・一四、一五 九〇 賽四三・一四、一五
 九一 賽四三・一四、一五 九一 賽四三・一四、一五 九一 賽四三・一四、一五 九一 賽四三・一四、一五
 九二 賽四三・一四、一五 九二 賽四三・一四、一五 九二 賽四三・一四、一五 九二 賽四三・一四、一五
 九三 賽四三・一四、一五 九三 賽四三・一四、一五 九三 賽四三・一四、一五 九三 賽四三・一四、一五
 九四 賽四三・一四、一五 九四 賽四三・一四、一五 九四 賽四三・一四、一五 九四 賽四三・一四、一五
 九五 賽四三・一四、一五 九五 賽四三・一四、一五 九五 賽四三・一四、一五 九五 賽四三・一四、一五
 九六 賽四三・一四、一五 九六 賽四三・一四、一五 九六 賽四三・一四、一五 九六 賽四三・一四、一五
 九七 賽四三・一四、一五 九七 賽四三・一四、一五 九七 賽四三・一四、一五 九七 賽四三・一四、一五
 九八 賽四三・一四、一五 九八 賽四三・一四、一五 九八 賽四三・一四、一五 九八 賽四三・一四、一五
 九九 賽四三・一四、一五 九九 賽四三・一四、一五 九九 賽四三・一四、一五 九九 賽四三・一四、一五
 一〇〇 賽四三・一四、一五 一〇〇 賽四三・一四、一五 一〇〇 賽四三・一四、一五 一〇〇 賽四三・一四、一五

一 たひらかにし銅の門をこぼちくろがねの關 木をたちきるべし 一 われなんぢに暗ところの財寶とひそかなると
 二 ころに藏せるたからとを予へなんぢに我はエホバなんぢの名をよべるイスラエルの神なるを知しめん 二 わが
 三 僕ヤコブわが撰みたるイスラエルのために我なんぢの名をよべり汝われを知すといへどわれ名をなんぢに賜ひた
 四 り 四 われはエホバなり我のほかに神なし一人もなし汝われをしらすといへども我なんぢを固うせん 四 而して
 五 日のいづるところより西のかたまで人々我のほかに神なしと知べし我はエホバなり他にひとりもなし 五 われは
 六 光をつくり又くらきを創造すわれは平和をつくりまた禍害をさうさうす我はエホバなり我すべてこれらの事をな
 七 すなり 六
 八 天ようへより滴らすべし雲よ義をふらすべし地はひらけて救を生じ義をもともに萌いだすべしわれエホバ
 九 之を創造せり 七
 一〇 世人はすゑものの中のひとつの陶器なるに己をつくれる者とあらそふはわざはひなるかな泥塊はすゑも
 一一 のつくりむかひて汝なを作るかといふべけんや又なんぢの造りたる者なんぢを手なしといふべけんや 一〇 父
 一二 にむかひて汝なにゆゑに生むことをせしやといひ婦にむかひて汝なにゆゑに産のくるしみをなしやといふ者は
 一三 わざはひなるかな 一二
 一四 エホバ、イスラエルの聖者イスラエルの造れるもの如此いひたまふ後きたらんとすることを我にとへまた
 一五 わが子女とわが手の工につきて汝等われに言せよ 一四 われ地をつくりてそのうへに人を創造せりわれ自らの

ことをおもひいでよわれは神なり我のほかに神なしわれは神なり我のごとき者なし 一〇 われは終の事を始より
 つげいまだ成ざることを昔よりつげわが謀畧はかならず立といひすべて我がよろこぶことを成んといへり 二
 れ東より鷲をまねき遠國よりわが定めおける人をまねかん我このことを語りたれば必ず來らすべし我このこと
 を謀りたればかならず成すべし

三 なんぢら心かたくなにして義にとほざかるものよ我にきけ 一三 われわが義をちかづかしむ可ればその來る
 こと遠からずわが救おそからず我すくひをシオンにあたへわが榮光をイスラエルにあたへん

第七章

一 バビロンの處女よくだりて塵のなかにすわれカルデア人のむすめよ座にすわらずして地にすわれ
 汝ふたゝび婀娜にして嬌なりとなへらるゝことなからん 二 碧をとりて粉をひけ面帕をとりさり
 往をぬぎ髓をあらはして河をわたれ 三 なんぢの肌はあらはれなんぢの恥はみゆべしわれ仇をむくいて人をかへ
 りみす 四 われらを贖ひたまふ者はその名を萬軍のエホバ、イスラエルの聖者といふ 五 カルデア人のむすめよ
 なんぢ口をつぐみてすわれ又くらき所にいりてをれ汝ふたゝびもろもろの國の主母となへらるゝことなからん
 六 われわが民をいきどほりわが産業をけがして之をなんぢの手にあたへたり汝これに憐憫をほどこさず年老たる
 もののうへに甚だおもき軛をおきたり 七 汝いへらく我とこしへに主母たらんと斯てこれらのことを心にとめず
 亦その終をおもはざりき 八
 九 なんぢ歡樂にふけり安らかにをり心のうちにたゞ我のみにして我のほかに誰もなく我はやもめとなりてを

イ賽四五・五、二二 二賽四一・二、二五 三羅一〇・三 四耶一三・二二、 一五 五賽四六・八
 ロ賽四五・二二 六賽四四・二八、四五 七賽五一・五 羅一 八出二・一五 十一六 九羅一・二九 一三 一〇賽四三・二八
 ハ詩三三・一二、一七、一九 一七、三三、二二 九出二・一五 十一六 十羅一・二九 一三 一一賽四三・二八
 一、二、三、三〇、三三、三九 又哈二・三 一〇賽四三・三、一四 耶 一三 一二賽四三・二八
 五、三九、六六、一七 卜詩七六・五 又哈二・三 一〇賽四三・三、一四 耶 一三 一二賽四三・二八
 九 一賽四一・二、二五 二賽四一・二、二五 三羅一〇・三 四耶一三・二二、 一五 五賽四六・八
 十賽四五・二二 六賽四四・二八、四五 七賽五一・五 羅一 八出二・一五 十一六 九羅一・二九 一三 一〇賽四三・二八
 十一賽三三・一二、一七、一九 一七、三三、二二 九出二・一五 十一六 十羅一・二九 一三 一二賽四三・二八
 十二、三、三〇、三三、三九 又哈二・三 一〇賽四三・三、一四 耶 一三 一二賽四三・二八
 十三、三九、六六、一七 卜詩七六・五 又哈二・三 一〇賽四三・三、一四 耶 一三 一二賽四三・二八

九 らすまた子をうしなふことを知まじとおもへる者よなんぢ今きけ 九二 子をうしなひ寡婦となるこの二つのこと
 一日のうちに俄になんぢに來らん汝おほく魔術をおこなひひろく呪詛をほどこすと雖もみちみちて汝にきたる
 べし 一〇 汝おのれの惡によりたのみていふ我をみるものなしとなんぢの智慧となんぢの聰明とはなんぢを惑せ
 たりなんぢ心のうちにおもへらくたゞ我のみにして我のほかに誰もなしと 二 此の故にわざはひ汝にきたらん
 なんぢ呪ひてこれを除くことをしらす艱難なんぢに落きたらん汝これをはらふこと能はずなんぢの思ひよらざる
 荒廢にはかに汝にきたるべし

二 今なんぢわかきときより勤めおこなひたる呪詛とおほくの魔術とをもて立ちかふべしあるひは益をうるこ
 とあらんあるひは敵をおそれしむることあらん 三 なんぢは謀畧おほきによりて倦つかれたりかの天をうらなふ
 もの星をみるもの新月をうらなふ者もし能はざりざちて汝をきたらんとする事よいまぬかれしむることをせよ
 一四 彼らは薬のごとくなりて火にやかれんおのれの身をほのほの勢力よりすくひいだすこと能はずその火は身を
 あたゝむべき炭火にあらず又その前にすわるべき火にもあらず 一五 汝がつとめて行ひたる事は終にかくのごとく
 ならん汝のわかきときより汝とよりかひしたる者おのその所にさすらひゆきて一人だになんぢを救ふもの
 なかるべし

第八章

一 ヤコブの家よなんぢら之をきけなんぢらはイスラエルの名をもて稱へられユダの根源よりいで
 エホバの名によりて誓ひイスラエルの神をかたりつくれども眞實をもてせず正義をもてせざるなり
 二 かれらはみづから聖京のものととなへイスラエルの神によりたのめりその名は萬軍のエホバといふ 三 われ

五 ヤコブをふたゝび己にかへらしめイスラエルを己のもとにあつませんとて我をうまいでしより立ておのれの僕となしたまへるエホバの前にたふとくせらる又わが神はわが力となりたまへり

六 その聖言にはくなんぢわが僕となりてヤコブのもろもろの支派をおこしイスラエルのうちののこりて全うせしものを歸らしむることはいと輕し我また汝をたて、異邦人の光となし我がすくひを地のはてにまで到らしむ

七 エホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は人にあなどらるゝもの民にいみきはるゝもの長たちに役せらるゝ者にむかひて如此いひたまふもろの王は見てたちもろの君はみて拜すべしこれ信實あるエホバ、イスラエルの聖者なんぢを選びたまへるが故なり

八 エホバ如此いひたまふわれ恵のときに汝にこたへ救の日になんぢを助けたりわれ汝をまもりて民の契約とし國をおこし荒すたれたる地をまた産業としてかれらにつがしめん われ縛しめられたる者にいでよといひ暗にをるものに顯れよといはんかれら途すがら食ふことをなしもろの禿なる山にも牧草をうべし

九 暗にをるものに顯れよといはんかれら途すがら食ふことをなしもろの禿なる山にも牧草をうべし

一〇 暗にをるものに顯れよといはんかれら途すがら食ふことをなしもろの禿なる山にも牧草をうべし

一一 暗にをるものに顯れよといはんかれら途すがら食ふことをなしもろの禿なる山にも牧草をうべし

一二 暗にをるものに顯れよといはんかれら途すがら食ふことをなしもろの禿なる山にも牧草をうべし

一三 暗にをるものに顯れよといはんかれら途すがら食ふことをなしもろの禿なる山にも牧草をうべし

一四 然どシオンはいへりエホバ我をすて主われをわすれたまへりと 婦その乳兒をわすれて己がはらの子を

一五 然どシオンはいへりエホバ我をすて主われをわすれたまへりと 婦その乳兒をわすれて己がはらの子を

一六 われ掌になんぢ

イ太二三・三七 路二・三二 徒一三 六七 へ詩六九・一三 哥後 二・七 聖四二・七 聖九 又詩一二一・六 一〇・一一 一〇・一二 一〇・一三 一〇・一四 一〇・一五 一〇・一六 一〇・一七 一〇・一八 一〇・一九 一〇・二〇 一〇・二一 一〇・二二 一〇・二三 一〇・二四 一〇・二五 一〇・二六 一〇・二七 一〇・二八 一〇・二九 一〇・三〇 一〇・三一 一〇・三二 一〇・三三 一〇・三四 一〇・三五 一〇・三六 一〇・三七 一〇・三八 一〇・三九 一〇・四〇 一〇・四一 一〇・四二 一〇・四三 一〇・四四 一〇・四五 一〇・四六 一〇・四七 一〇・四八 一〇・四九 一〇・五〇 一〇・五一 一〇・五二 一〇・五三 一〇・五四 一〇・五五 一〇・五六 一〇・五七 一〇・五八 一〇・五九 一〇・六〇 一〇・六一 一〇・六二 一〇・六三 一〇・六四 一〇・六五 一〇・六六 一〇・六七 一〇・六八 一〇・六九 一〇・七〇 一〇・七一 一〇・七二 一〇・七三 一〇・七四 一〇・七五 一〇・七六 一〇・七七 一〇・七八 一〇・七九 一〇・八〇 一〇・八一 一〇・八二 一〇・八三 一〇・八四 一〇・八五 一〇・八六 一〇・八七 一〇・八八 一〇・八九 一〇・九〇 一〇・九一 一〇・九二 一〇・九三 一〇・九四 一〇・九五 一〇・九六 一〇・九七 一〇・九八 一〇・九九 一〇・一〇〇

一七 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

一八 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

一九 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二〇 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二一 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二二 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二三 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二四 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二五 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

二六 七を彫刻めりなんぢの石垣はつねにわが前にあり なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者はなんぢより出さらん なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帯のごとくに之をまとふべし

裔の口より汝のすゑの裔の口よりはなれざるべしわがかれらにたつる契約はこれなりと此はエホバのみことばなり

第六〇章

起よひかりを發てなんぢの光きたりエホバの榮光なんぢのうへに照出たればなり 視よ くらきは地をおほひ闇はもろもろの民をおほはんされどなんぢの上にはエホバ照出たまひてその榮光なんぢのうへに顯はるべし 一 二 もろもろの國はなんぢの光にゆきもろもろの王はてり出るなんぢが光輝にゆかん 三

なんぢの目をあげて環視せかれらは皆つどひて汝にきたりなんぢの子輩はとほきより來りなんぢの女輩は 四 いだかれて來らん 五 そのときなんぢ視てよろこびの光をあらはしなんぢの心おどろきあやしみ且ひろらかに なるべしそは海の富はうつりて汝につきもろもろの國の貨財はなんぢに來るべければなり 六 おほくの駱駝 ミデアンおよびエバのわかき駱駝なんぢの中にあまねくみちシバのもろもろの人こがね乳香をたづさへきたりて 七 エホバの譽をのべつたへん 八 ケダルのひつじの群はみな汝にあつまりきたりネバヨテの牡羊はなんぢに事へ 九 わが祭壇のうへにのぼりて受納られん斯てわれわが榮光の家をかゞやかすべし 一〇 雲のごとくとび鳩のその 策にとびかへるが如くしてきたる者はたれぞ 一〇 もろもろの鳥はわれを俟望みタルシシのふねは首先になんぢの 子輩をとほきより載きたり並かれらの金銀をとものにのせきたりてなんぢの神エホバの名にさゞげイスラエルの 聖者にさゞげんエホバなんぢを輝かせたまひたればなり 一〇 異邦人はなんぢの石垣をきづきかれらの王等はなんぢに事へんそは我いかりて汝をうちしかどまた恵を

イ 弗五・二四 ハ 賽四九・一八 ホ 羅一・二五 チ 賽六一・六 太三・二七、九 ヲ 加四・二六 カ 耶三・一七
ロ 賽四九・六、三 二 賽四九・二〇、二二、 二 賽四九・二七、一 九 九 賽四九・三三、三三、 六、六六、一一、 一 賽四九・三三、三三、 二 賽四九・三三、三三、
二二、二四、 二 賽四九・二〇、二二、 二 賽四九・二七、一 九 九 賽四九・三三、三三、 六、六六、一一、 一 賽四九・三三、三三、 二 賽四九・三三、三三、
二二、二四、 二 賽四九・二〇、二二、 二 賽四九・二七、一 九 九 賽四九・三三、三三、 六、六六、一一、 一 賽四九・三三、三三、 二 賽四九・三三、三三、

ツ 賽五四・七八

もて汝を憐みたればなり 二 一 なんぢの門はつねに開きて夜も日もとざすことなしこは人もろもろの國の貨財を 二 二 なんぢに携へきたりその王等をひきぬ來らんがためなり 二 三 なんぢに事へざる國と民とはほろびそのくにぐには 三 全くあれすたるべし 二 三 レバノンの榮はなんぢにきたり松杉黄楊はみな共にきたりて我が聖所をかゞやかさん 三 四 われ亦わが足をおく所をたふとくすべし 二 四 なんぢを苦しめたるものの子輩はかゞみて汝にきたり汝をさげしめ 三 五 たる者はことごとくなんぢの足下にふし斯てなんぢをエホバの都イスラエルの聖者のシオンとなへん 三 五 二 五 なんぢ前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが今はわれ汝をとこしへの華美よゝの歡喜と 三 六 二 六 なんぢ亦もろもろの國の乳をすひ王たちの乳房をすひ而して我エホバなんぢの救主なんぢの贖主 三 六 二 六 ヤコブの全能者なるを知るべし 二 七 われ黄金をたづさへきたりて赤銅にかへ白銀をたづさへきたりて 鐵にかへ 三 七 赤銅を木にかへ鐵を石にかへなんぢの施政者をおだやかにしなんぢを役するものを義うせん 一 八 強暴のこと再び 三 八 なんぢの地にきこえず殘害と敗壞とはふたゞびなんぢの境にきこえず汝その石垣をすくひととなへその門を譽と 三 九 となへん 一 九 晝は日ふたゞびなんぢの光とならず月もまた輝きてなんぢを照さずエホバ永遠になんぢの光となり 三 九 二 九 なんぢの神はなんぢの榮となりたまはん 二 〇 なんぢの日はふたゞび落すなんぢの月はかくることなかるべしそは 三 〇 エホバ永遠になんぢの光となり汝のみなしみの日畢るべければなり 二 〇 二 〇 なんぢの民はことごとく義者となりて 三 〇 二 〇 とこしへに地を嗣んかれはわが植たる樹株わが手の工わが榮光をあらはす者となるべし 三 〇 三 〇 その小きものは千と 三 〇 三 〇 なりその弱きものは強國となるべしわれエホバその時いたらば速かにこの事をなさん 三 〇 三 〇

二一 ごとくその豊なる榮をうけておのづから心さわやかならん
 二二 エホバ如此いひたまふ視よわれ河のごとくかれに
 二三 平康をあたへ漲ぎる流のごとく彼にもろもろの國の榮をあたへん而して汝等これをすひ背におはれ膝におかれて
 二四 樂しむべし 母の子をなぐさむるごとく我もなんぢらを慰めんなんぢらはエルサレムにて安慰をうべし
 二五 なんぢら見て心よろこばんなんぢらの骨は若草のさかゆるごとくなるべしエホバの手はその僕等にあらはれ
 二六 又その仇をばげしく怒りたまはん

二七 視よエホバは火中にあらはれて來りたまふその車輦ははやちのごとし烈しき威勢をもてその怒をもらし
 二八 火のほのほをもてその譴をほどこし給はん エホバは火をもて劍をもてよろづの人を刑ひたまはんエホバに
 二九 刺殺さるゝもの多かるべし エホバ宣給くみづからを潔くしみづからを別ちて園にゆきその中にある木の像に
 三〇 したがひ豕の肉けがれたる物および鼠をくらふ者はみな共にたえうせん

三一 我かれらの作爲とかれらの思念とをしれり時きたらばもろもろの國民ともろもろの族とをあつめん彼等
 三二 きたりてわが榮光をみるべし 我かれらのなかに一つの休徴をたてゝ逃れたる者をもろもろの國すなはち
 三三 タルシシよく弓をひくブル、ルデおよびトバル、ヤワン又わが聲名をきかずわが榮光をみざる遙かなる諸島につか
 三四 はさん彼等はわが榮光をもろもろの國のべつたふべし エホバいひたまふかれらはイスラエルの子輩がきよ
 三五 き器にそなへものをもりてエホバの家にとざさへきたるがごとくなんぢらの兄弟をもろもろの國の中よりたづさ
 三六 へて馬車、驕駱駝にのらしめわが聖山エルサレムにきたらせてエホバの祭物とすべし エホバいひたまふ
 三七 我また彼等のうちより人をえらびて祭司としレビ人とせん

イ賽四八・一八、六〇、ハ賽四九・二二、六〇、ホ賽九五、撒後一・八、チ路二・三四、ル出一九・六、賽六一・
 一・五、ヘ賽二七・一、リ馬一・一一、六、彼前二・九、歌
 ロ賽六〇・一六、ニ結三七・一、ト賽六五・三四、又賽一五・一六、一・六

三三 エホバ宣給くわが造らんとする新しき天とあたらしき地とわが前にながくとゞまる如くなんぢの裔となん
 三四 ちの名はながくとゞまらん エホバいひたまふ新月ごとに安息日ごとによるづの人わが前にきたりて崇拜をな
 三五 さん かれら出てわれに逆きたる人の屍をみんその蛆しなすその火きえずよろづの人にいみきはるべし

イザヤ書をばり

あらずや 何故にエルサレムにをる此民は恒にわれを離れて歸らざるや彼らは詐偽をかたく執て歸ることを否めり
 われ耳を側て、聽に彼らは善ことを云す一人もその惡を悔いてわがなせし事は何ぞやといふ者なし彼らはみな戰場に馳入る馬のごとくにその途に歸るなり
 天空の鶴はその定期を知り斑鳩と燕と鷹はそのきたる時を守るされど我民はエホバの律法をしらざるなり

汝いかで我ら智慧ありわれらにはエホバの律法ありといふことをえんや視よまことに書記の偽の筆之を偽とせり
 智慧ある者は辱しめられたあわて、執へらる視よ彼等エホバの言を棄たり彼ら何の智慧あらんや
 故にわれその妻を他人にあたへ其田圃を他人に嗣しめん彼らは小さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者また預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり
 彼ら我民の女の傷を淺く醫し平康からざる時に平康平康といへり
 彼ら憎むべき事をなして恥辱らる然れど毫も恥すまた恥を知らずこの故に彼らは仆る者
 者と借に仆れんわが彼らを罰するときかれら躓くべしとエホバいひたまふ
 エホバいひたまふ我彼らをことごとく滅さん葡萄の樹に葡萄なく無花果の樹に無花果なしその葉も楢れたり故にわれ殲滅者を彼らにつかはす

我ら何ぞ此にとどまるやあつまれよ我ら堅き城邑にゆきて其處に滅ん我儕エホバに罪を犯せしによりて我らの神エホバ我らを滅し毒なる水を飲せたまへばなり
 われら平康を望めども善こと來らず慰めらるゝ時を望むにかへつて恐懼きたる
 その馬の嘶はダンよりきこえこの地みなその強き馬の聲によりて震ふ彼らきたりて此地とその上にある者および邑とその中に住る者を食ふ
 視よわれ呪詛のきかざる蛇虺を汝らのうちに遣さ

嗚呼われ憂ふいかにして慰藉をえんや我衷の心悩む
 みよ遠き國より我民の女の聲ありていふエホバはシオンに在さざるか其王はその中に在さるか
 (エホバいひたまふ) 彼らは何故にその偶像と異邦の虚き物をもて我を怒らせしやと
 收穫の時は過ぎ夏もはや畢りぬされど我らはいまだ救はれず
 我民の女の傷によりて我も傷み且悲しむ恐懼我に迫れり
 ギレアデに乳香あるにあらずや彼處に醫者あるにあらずやいかにして我民の女はいやされざるや

第九章
 あゝ我わが首を水となし我目を涙の泉となすことをえんものを我民の女の殺されたる者の爲に晝夜哭かん
 嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを我民を離れてさりゆかん彼らはみな姦淫するもの悖れる者の族なればなり
 彼らは弓を援くがごとく其舌をもて偽をいだす彼らは此地において眞實のために強からず惡より惡にすゝみまた我を知らざるとエホバいひたまふ
 汝らおのおの其隣に心せよ何の兄弟をも信する勿れ兄弟はみな欺きをなし隣はみな讒りまはればなり
 彼らはおのおの其隣を欺きかつ眞實をいはず其舌に 詭をかけたることを教へ惡をなすに勞る
 汝の住居は詭譎の中にあり彼らは詭譎のために我を識ことをいなめりとエホバいひたまふ

故に萬軍のエホバかくいひたまへり視よ我かれらを鏖し試むべしわれ我民の女の事を如何になすべきや
 彼らの舌は殺す矢のごとしかれら詭をいふまた其口をもて隣におだやかにかたれども其心の中には害をはかるなり
 エホバいひたまふ我これらの事のために彼らを罰せざらんや我心はかくのごとき民に仇を復さざらんや

嗚呼われ憂ふいかにして慰藉をえんや我衷の心悩む
 みよ遠き國より我民の女の聲ありていふエホバはシオンに在さざるか其王はその中に在さるか
 (エホバいひたまふ) 彼らは何故にその偶像と異邦の虚き物をもて我を怒らせしやと
 收穫の時は過ぎ夏もはや畢りぬされど我らはいまだ救はれず
 我民の女の傷によりて我も傷み且悲しむ恐懼我に迫れり
 ギレアデに乳香あるにあらずや彼處に醫者あるにあらずやいかにして我民の女はいやされざるや

九 八 七 六 五 四 三 二 一
 一四一七 一四一八 一四一九 一四二〇 一四二一 一四二二 一四二三 一四二四 一四二五 一四二六 一四二七 一四二八 一四二九 一四三〇 一四三一 一四三二 一四三三 一四三四 一四三五 一四三六 一四三七 一四三八 一四三九 一四四〇 一四四一 一四四二 一四四三 一四四四 一四四五 一四四六 一四四七 一四四八 一四四九 一四五〇 一四五一 一四五二 一四五三 一四五四 一四五五 一四五六 一五五七 一五五八 一五五九 一五六〇 一五六一 一五六二 一五六三 一五六四 一五六五 一五六六 一五六七 一五六八 一五六九 一五七〇 一五七一 一五七二 一五七三 一五七四 一五七五 一五七六 一五七七 一五七八 一五七九 一五八〇 一五八一 一五八二 一五八三 一五八四 一五八五 一五八六 一五八七 一五八八 一五八九 一五九〇 一五九一 一五九二 一五九三 一五九四 一五九五 一五九六 一五九七 一五九八 一五九九 一六〇〇 一六〇一 一六〇二 一六〇三 一六〇四 一六〇五 一六〇六 一六〇七 一六〇八 一六〇九 一六一〇 一六一一 一六一二 一六一三 一六一四 一六一五 一六一六 一六一七 一六一八 一六一九 一六二〇 一六二一 一六二二 一六二三 一六二四 一六二五 一六二六 一六二七 一六二八 一六二九 一六三〇 一六三一 一六三二 一六三三 一六三四 一六三五 一六三六 一六三七 一六三八 一六三九 一六四〇 一六四一 一六四二 一六四三 一六四四 一六四五 一六四六 一六四七 一六四八 一六四九 一六五〇 一六五一 一六五二 一六五三 一六五四 一六五五 一六五六 一六五七 一六五八 一六五九 一六六〇 一六六一 一六六二 一六六三 一六六四 一六六五 一六六六 一六六七 一六六八 一六六九 一六七〇 一六七一 一六七二 一六七三 一六七四 一六七五 一六七六 一六七七 一六七八 一六七九 一七八〇 一七八一 一七八二 一七八三 一七八四 一七八五 一七八六 一七八七 一七八八 一七八九 一七九〇 一七九一 一七九二 一七九三 一七九四 一七九五 一七九六 一七九七 一七九八 一七九九 一八〇〇 一八〇一 一八〇二 一八〇三 一八〇四 一八〇五 一八〇六 一八〇七 一八〇八 一八〇九 一八一〇 一八一 一八一二 一八一三 一八一四 一八一五 一八一六 一八一七 一八一八 一八一九 一八二〇 一八二一 一八二二 一八二三 一八二四 一八二五 一八二六 一八二七 一八二八 一八二九 一八三〇 一八三一 一八三二 一八三三 一八三四 一八三五 一八三六 一八三七 一八三八 一八三九 一八四〇 一八四一 一八四二 一八四三 一八四四 一八四五 一八四六 一八四七 一八四八 一八四九 一八五〇 一八五一 一八五二 一八五三 一八五四 一八五五 一八五六 一八五七 一八五八 一八五九 一八六〇 一八六一 一八六二 一八六三 一八六四 一八六五 一八六六 一八六七 一八六八 一八六九 一八七〇 一八七一 一八七二 一八七三 一八七四 一八七五 一八七六 一八七七 一八七八 一八七九 一八八〇 一八八一 一八八二 一八八三 一八八四 一八八五 一八八六 一八八七 一八八八 一八八九 一八九〇 一八九一 一八九二 一八九三 一八九四 一八九五 一八九六 一八九七 一八九八 一八九九 一九〇〇 一九〇一 一九〇二 一九〇三 一九〇四 一九〇五 一九〇六 一九〇七 一九〇八 一九〇九 一九一〇 一九一一 一九一二 一九一三 一九一四 一九一五 一九一六 一九一七 一九一八 一九一九 一九二〇 一九二一 一九二二 一九二三 一九二四 一九二五 一九二六 一九二七 一九二八 一九二九 一九三〇 一九三一 一九三二 一九三三 一九三四 一九三五 一九三六 一九三七 一九三八 一九三九 一九四〇 一九四一 一九四二 一九四三 一九四四 一九四五 一九四六 一九四七 一九四八 一九四九 一九五〇 一九五一 一九五二 一九五三 一九五四 一九五五 一九五六 一九五七 一九五八 一九五九 一九六〇 一九六一 一九六二 一九六三 一九六四 一九六五 一九六六 一九六七 一九六八 一九六九 一九七〇 一九七一 一九七二 一九七三 一九七四 一九七五 一九七六 一九七七 一九七八 一九七九 一九八〇 一九八一 一九八二 一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五 一九九六 一九九七 一九九八 一九九九 二〇〇〇

らに遣して汝等エホバの重負といふべからずといはしむるも汝らはエホバの重負といふ此言をいふによりて
三九 われ必ず汝らを忘れ汝らと汝らの先祖にあたへし此邑と汝らとを我前より棄ん 四〇 且われ永遠の辱と永遠
なる忘るゝことなき恥を汝らにかうむらしめん

第二章

一 バビロンの王ネブカデネザル、ユダの王エホヤキムの子エコニヤおよびユダの牧伯等と木匠と
鐵匠をエルサレムよりバビロンに移せしうちエホバ我にエホバの殿の前に置れたる二筐の無花果を
示したまへり 二 その一の筐には始に熟せしがごとき至佳き無花果ありその一の筐にはいと悪くして食ひ得ざる
ほどなる悪き無花果あり 三 エホバ我にいひたまひけるはエレミヤよ汝何を見しや我答へけるは無花果なりその
佳き無花果はいと佳しその悪きものは至悪くして食ひ得ざるほどに悪し

四 エホバの言また我にのぞみていふ 五 イスラエルの神エホバかくいふ我わが此處よりカルデヤ人の地に逐
やりしユダの虜人を此佳き無花果のごとくに顧みて恵まん 六 我彼等に目をかけて之をめぐみ彼らを此地にか
へし彼等を建て付さず植て拔じ 七 我彼らに我のエホバなるを識るの心をあたへん彼等我民となり我彼らの神と
ならん彼等は一心をもて我に歸るべし

八 エホバかくいひたまへり我ユダの王ゼデキヤとその牧伯等およびエルサレムの人の遺りて此地にをる者な
らびにエジプトの地に住る者とを此悪くして食はれざる悪き無花果のごとくなさん 九 我かれらをして地のも
ろもろの國にて虐遇と災害にあはしめん又彼らをしてわが逐やらん諸の處にて辱にあはせ諺となり嘲と詛に
遭しめん 一〇 われ劍と饑饉と疫病をかれらの間におくりて彼らをしてわが彼らとその先祖にあたへし地に絶るに

イ何四六 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
ロ耶三三・三三 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
ハ耶三三・三三 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
ニ王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
三王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
四王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
五王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
六王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
七王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
八王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
九王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代
一〇王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代 二王下二四・一二 代

いたらしめん

第二章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年バビロンの王ネブカデネザルの元年にユダのすべての民に
かゝはる言エレミヤにのぞめり 二 預言者エレミヤこの言をユダのすべての民とエルサレムにすめ
るすべての者に告げていひけるは 三 ユダの王アモンの子ヨシヤの十三年より今日にいたるまで二十三年のあひだ
エホバの言我にのぞめり我これを汝等に告げ頻にこれを語りしかども汝らきかさりし 四 エホバその僕なる預言
者を汝らに遣し頻に遣したまひけれども汝らはきかず又きかんとて耳を傾けざりき 五 彼らいへり汝等おのおの
いま其悪き途とその悪き行を棄よ然ばエホバが汝らと汝らの先祖に與へたまひし地に永遠より永遠にいたるまで
住ことをえん 六 汝ら他の神に従ひこれに事へこれを作りし物をもて我を怒らして自ら害へりとエホバいひたま
汝らを害はじ 七 然ど汝らは我にきかず汝等の手にて作りし物をもて我を怒らして自ら害へりとエホバいひたま
ふ 八 この故に萬軍のエホバかく云たまふ汝ら我言を聴ざれば 九 視よ我北の諸の族と我僕なるバビロンの王
ネブカデネザルを招きよせ此地とその民と其四圍の諸國を攻滅さしめて之を説異物となし人の嗤笑となし永遠
の荒地となさんとエホバいひたまふ 一〇 またわれ欣喜の聲歡樂の聲新夫の聲新婦の聲磨磨の音および燈の光
を彼らの中にたえしめん 二 此の地はみな空曠となり詫異物とならん又その諸國は七十年の間バビロンの王に
つかふべし

三 エホバいひたまふ七十年のをはりし後我バビロンの王と其民とカルデヤの地をその罪のために罰し永遠の
エレミヤ記 二五・一—二二

空曠となさん 我かの地につきて我かたりし諸の言をその上に臨しめん是エレミヤが萬國の事につきて預言したる者にて皆この書に録さるゝなり 多の國々と大なる王等は彼らをして己につかへしめん我かれらの行爲とその手の所作に循ひてこれに報いん

イスラエルの神エホバかく我に云たまへり我手より此怒の杯をうけて我汝を遣すところの國々の民に飲しめよ 彼らは飲てよるめき狂はんこは我かれらの中に劍をつかはすによりてなり 是に於てわれエホバの手より杯をうけエホバのわれを遣したまふところの國々の民に飲しめたり 即ちエルサレムとユダの諸の邑とその王等およびその牧伯等に飲せてこれをほろぼし詭異物となし人の嗤笑となし詛るゝ者となせり今日のごとし またエジプトの王バロと其臣僕その牧伯等その諸の民と 諸の雜種の民およびウズの諸の王等およびペリシテ人の地の諸の王等アシケロン、ガザ、エクロン、アシドドの遺餘の者 エドム、モアブ、アンモンの子孫 ツロのすべての王等シドンのすべての王等海のかなたの島々の王等 デダン、テマ、ブスおよびすべてをそる者 アラビアのすべての王等曠野の雜種の民の諸の王等 ジムリの諸の王等エラムの諸の王等メデアのすべての王等 北のすべての王等その彼と此とにおいて或は遠者或は近きもの凡地の面にある世の國々の王等はこの杯を飲んセンヤク王はこれらの後に飲べし

故に汝かれらに語ていへ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我汝等の中に劍を遣すによりて汝らは飲みまた酔ひまた吐き又仆て再び起されと 彼等もし汝の手より此杯を受て飲ずば汝彼らにいへ萬軍の

イ耶五〇・九、五一・二五五〇・二九、五一へ耶五二・七、結三三
 二七・二八、二六・二四、三三・二二、ル伯一・一
 耶五〇・四一、五一、未伯二・二〇、詩二四・九、二一、五七
 七五・八、賽五・一、テ耶二四・九、ワ賽二〇・一
 八耶二七・七、一七、歌一四・一〇、リ耶四六・二、二五、九耶四九・七
 ヨ耶四八・一、レ耶四七・四、ソ耶四九・二、三、ツ耶四九・八
 未耶九・二六、四九、ム耶四九・三四、六
 三二、ナ代九・一四、ウ耶五〇・九
 ラ耶二五・二〇、四九、ノ哈二・一六
 一七一、五〇・三七、オ賽五二・一、一六、三三

ク俱九・二八、一九、マ結三八・二二、コ王上九・三、詩一三、ア賽六六・二六、耳三、ユ耶一六・四、六、エ詩七六・二
 十、二二、二、ケ賽四二・二二、耳三、二二、四、エ賽一六・九、耶四八、サ耶二二・一九、三〇、ミ耶四・八、六、二六、ヒ耶一九・二四、モ結三・一〇、太二八・
 四九・二二、結九、フ詩二一・四、耶一七、三三、三、テ何四・一、米六・二、キ賽六六・二六、二〇、二〇、七、セ徒二〇・二七
 六、阿一六、路二三、三一、彼前四・一七、二二、一、米六・二、キ賽六六・二六、二〇、二〇、七、セ徒二〇・二七

エホバかくいひたまふ汝ら必ず飲べし 視よわれ我名をもて稱へらるゝこの邑にすら災を降すなり汝らいかで罰を免るゝことをえんや汝らは罰を免れし蓋われ劍をよびて地に住るすべての者を攻べければなりと萬軍のエホバいひたまふ

汝彼等にこの諸の言を預言していふべしエホバ高き所より呼號り其聖宮より聲を出し己の住家に向てよばはり地に住る諸の者にむかひて葡萄を踐む者のごとく眺たまはん 號眺地の極まで聞ゆ蓋エホバ列國と争ひ萬民を審き悪人を劍に付せば也とエホバ曰たまへり

萬軍のエホバかく曰たまふ視よ災いでて國より國にいたらん大なる暴風地の極よりおこるべし 其日エホバの戮したまふ者は地の此極より地の彼の極に及ばん彼等は哀まれず殮められず葬られずして地の面に糞土とならん 牧者よ哭き叫べ群の長等よ汝ら灰の中に轉ぶべし蓋汝らの屠らるゝ日滿れば也我汝らを散すべければ汝らは貴き器のごとく墮べし 牧者は避場なく群の長等は逃る處なし 牧者の呼號の聲と群の長等の哀哭きこゆ蓋エホバ其牧場を滅したまへば也 エホバの烈き怒によりて平安なる牧場は滅さる 彼は獅子の如く其巢を出たり滅す者の怒と其烈き怒によりて彼らの地は荒されたり

第二十六章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のころエホバより此言いでていふ エホバかくいふ汝エホバの室の庭に立我汝に命じていはしむる諸の言をユダの邑々より來りてエホバの室に拜をする人々に告よ一言をも滅す勿れ 彼等聞ておのおの其惡き途を離るゝことあらん然ば我かれらの行の惡か

八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

成んことを 然ど汝いま我なんちの耳と諸の民の耳に語らんとする此言をきけ 我と汝の先にいでし預言者は古昔より多くの地と大なる國につきて戦闘と災難と疫病の事を預言せり 泰平を預言する所の預言者は若しその預言者の言とげなばその誠にエホバの遣したまへる者なること知らるべし 一〇 一〇に於て預言者ハナニヤ預言者エレミヤの項より鞭を取てこれを摧けり 一 一 ハナニヤ諸の民の前にて語りエホバかくいひたまふわれ二年のうちには是の如く萬國民の項よりバビロン王ネブカデネザルの鞭を摧きはなさんといふ預言者エレミヤ遂に去りぬ 一三 汝ゆき預言者ハナニヤ預言者エレミヤの項より鞭を摧きはなせし後エホバの言エレミヤに臨みていふ 一四 汝ゆきてハナニヤにエホバかくいふと告よ汝木の鞭を摧きたれども之に代て鐵の鞭を作れり 一四 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ我鐵の鞭をこの萬國民の項に置きてバビロンの王ネブカデネザルに事へしむ彼ら之につかへん 一五 われ野の獸をもこれに與へたり 一五 また預言者エレミヤ預言者ハナニヤにいひけるはハナニヤよ請ふ聽けエホバ汝を遣はしたまはず汝はこの民に 謙を信ぜしむるなり 一六 是故にエホバいひたまふ我汝を地の面よりのぞかん汝エホバに叛くことを教ふるによりて今年死ぬべしと 一七 預言者ハナニヤはこの年の七月死ぬり

第二九章
 預言者エレミヤ、エルサレムより書をかの擄へうつされて餘れるところの長老および祭司と預言者ならびにネブカデネザルがエルサレムよりバビロンに移したるすべての民に送れり 一 是より先エコニヤ王と王后と寺人およびユダとエルサレムの牧伯等および木匠と鐵匠はエルサレムをされり 二 エレミヤその書をシャパンの子エラサおよびヒルキヤの子ゲマリヤ即ちユダの王ゼデキヤがバビロンにつかはしてバビロンの王ネブカデネザルにいたらしむる者の手によりて送れり其書にいはいはく 三 萬軍のエホバ、イスラエルの神す

イ申一八・二二 二申二八・四八 耶 一耶二九・三一 結 一三三 一三二 一三一 一三〇 一二九 一二八 一二七 一二六 一二五 一二四 一二三 一二二 一二一 一二〇 一一九 一一八 一一七 一一六 一一五 一一四 一一三 一一二 一一一 一一〇 一〇九 一〇八 一〇七 一〇六 一〇五 一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九十九 九十八 九十七 九十六 九十五 九十四 九十三 九十二 九十一 九十 八十九 八十八 八十七 八十六 八十五 八十四 八十三 八十二 八十一 八〇 七十九 七十八 七十七 七十六 七十五 七十四 七十三 七十二 七十一 七十 六十九 六十八 六十七 六十六 六十五 六十四 六十三 六十二 六十一 六十 五十九 五十八 五十七 五十六 五十五 五十四 五十三 五十二 五十一 五十 四十九 四十八 四十七 四十六 四十五 四十四 四十三 四十二 四十一 四十 三十九 三十八 三十七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

べて擄うつされし者即ち我エルサレムよりバビロンに移さしめし者にかくいふ 五 汝ら屋を建てこれに住ひ圃をつくりてその果をくらへ 六 妻を娶て子女をうみ又汝らの子に媳を娶り汝らの女を嫁がしめ彼らに子女を生しめよ此は汝等かしこに滅すして増んがためなり 七 我汝らを擄移さしめしところの邑の安を求めこれが爲にエホバにいのれその邑の安によりて汝らもまた安をうればなり 八 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らの中の預言者と卜筮士に惑はさるゝ勿れまた汝ら自ら作りしところの夢に聽したがふ勿れ 九 そは彼ら我名をもて 謙を汝らに預言すればなり我彼らを遣さずとエホバいひたまふ 一〇 エホバかくいひたまふバビロンに於て七十年満なばわれ汝らを脊み我嘉言を汝らになして汝らをこの處に歸らしめん 一一 エホバいひたまふ我が汝らにむかひて懐くところの念は我これを知るすなはち災をあたへんとあらず平安を與へんとおもひ又汝らに後と望をあたへんとおもふなり 一二 汝らわれに顔はり往て我にいのらん我汝らに聽べし 一三 汝らもし一心をもて我を索めなば我に尋ね遇はん 一四 エホバいひたまふ我汝らの遇ところとならんわれ汝らの俘擄を解き汝らを萬國よりすべて我汝らを逐やりし處より集め且我汝らをして擄らはれて離れしめしその處に汝らをひき歸らんとエホバいひたまふ

一五 エホバわれらの爲にバビロンに於て預言者を立たまひしと汝らはいふ 一六 ダビデの位に坐する王とこの邑に住るすべての民汝らと偕にとらへ移されざりし兄弟につきてエホバかくいひたまふ 一七 萬軍のエホバかくいふ視よわれ劍と饑饉と疫病を彼らにおくり彼らを悪くして食はれざる惡き無花果のごとくになさん 一八 われ劍と饑饉と疫病をもて彼らを逐ひまた彼らを地の萬國にわたして 虐にあはしめ我彼らを逐やる諸國に於て呪詛となり

二九 詫異となり人の嗤笑となり恥辱とならしめん 是彼ら我言を聴さればなりとエホバいひたまふ我この言を我僕
なる預言者によりて遣り頻におくれども汝ら聴ざるなりとエホバいひたまふ 三〇 わがエルサレムよりバビロンに
おくりし諸の俘擄人よ汝らエホバの言をきけ

二 我名をもて詭を汝らに預言するコラヤの子アハブとマアセヤの子ゼデキヤにつきて萬軍のエホバ、イスラ
エルの神かくいふ視よわれ彼らをバビロンの王ネブカデネザルの手に付さん彼これを汝らの目の前に殺すべし
三 バビロンにあるユダの俘擄人は皆彼らをもて詛となし願くはエホバ汝をバビロンの王が火にて焚しゼデキヤ
とアハブのごとき者となしたまはん事をといふ 三三 これは彼らイスラエルの中に悪をなし鄰の妻を犯し且我彼らに
命ぜざる 詭の言をわが名をもて語りしによる我これを知りまた證すとエホバいひたまふ

二四 汝ネヘラミ人シマヤにかく語りいふべし 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝おのれの名をもて
書をエルサレムにある諸の民と祭司マアセヤの子ゼバニヤおよび諸の祭司に送りていふ 二六 エホバ汝を祭司エホヤ
ダに代て祭司となし汝らをエホバの室の監督となしたまふ此すべて狂妄ひ且みづから預言者なりといふ者を獄と
桎梏につながしめんためなり 二七 然るに汝いま何故に汝らにむかひてみづから預言者なりといふところのアナト
テのエレミヤを斥責めざるや 二八 そは彼バビロンにをる我儕に書を送り時尙長ければ汝ら家を建て之に住ひ圃を
つくりてその實をくらへといへり 二九 祭司ゼバニヤこの書を預言者エレミヤに讀きかせたり 三〇 時にエホバの言
エレミヤにのぞみていふ 三二 諸の俘擄人に書をおくりて云べしネヘラミ人シマヤの事につきてエホバかくいふ
我シマヤを遣さざるに彼汝らに預言し汝らに詭を信ぜしめしによりて 三三 エホバかくいふ視よ我ネヘラミ人

イ耶二五・四、三三、 六五・一五 ホ王下二五・一八 耶 二六・二四 二七・二四 二八・二五 二九・二五 三〇・二五 三一・二五 三二・二五 三三・二五
イ耶二五・四、三三、 六五・一五 ホ王下二五・一八 耶 二六・二四 二七・二四 二八・二五 二九・二五 三〇・二五 三一・二五 三二・二五 三三・二五
イ耶二五・四、三三、 六五・一五 ホ王下二五・一八 耶 二六・二四 二七・二四 二八・二五 二九・二五 三〇・二五 三一・二五 三二・二五 三三・二五

シマヤと其子孫を罰すべし彼エホバに逆くことを教へしによりて此民のうちに彼に屬する者一人も住ふことなか
らん且我民に吾がなさんとする善事をみざるべしとエホバいひたまふ

第三〇章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 二 イスラエルの神エホバかく告ていふ我汝に言し言をこ
とごとく書に録せ 三 エホバいふわれ我民イスラエルとユダの俘囚人を返す日きたらんエホバこれ
をいふ我彼らをその先祖にあたへし地にかへらしめん彼らは之をたもたん

四 エホバのイスラエルとユダにつきていひたまひし言は是なり 五 エホバかくいふ我ら戦慄の聲をきく驚懼
あり平安あらず 汝ら子を産む男あるやを尋ね觀よ我男が皆子を産む婦のごとく手をその腰におき且その面色
皆青く變るをみるは何故ぞや 七 哀しいかなその日は大にして之に擬ふべき日なし此はヤコブの患難の時なり
然ど彼はこれより救出されん 八 萬軍のエホバいふ其日我なんぢの項よりその軛をくだきはなし汝の繩目をと
かん異邦人は復彼を使役はざるべし 九 彼らは其神エホバと我彼らの爲に立んところの其王ダビデにつかふべし
一〇 エホバいふ我僕ヤコブよ懼るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ我汝を遠方より救ひかへし汝の子孫を其とらへ移
されし地より救ひかへさんヤコブは歸りて平穩と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし 一一 エホバいふ我汝と
偕にありて汝を救はん設令われ汝を散せし國々を悉く滅しつくすとも汝をば滅しつくさじされど我道をもて汝
を懲さん汝を全たく罰せずにはおかさるべし

一二 エホバかくいふ汝の創は愈す汝の傷は重し 一三 汝の訟を理す者なく汝の創を裹む膏藥あらず 汝の愛
する者は皆汝を忘れて汝を求めず是汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我仇敵の撃がごとく汝を撃ち厳く汝を

とエルサレムに住る者にと告よエホバいひたまふ汝ら是我言を聴て教を受さるか
 レカブの子ヨナダブがその子孫に酒をのむべからずと命ぜし言は行はる彼らは今日に至るまで酒をのみす其先祖の命令に遵ふなり然るに汝らは吾汝らに語り頻に語れども我にきかざるなり
 我また我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣していはせけるは汝らいまおのおの其悪き道を離れて歸り汝らの行をあらためよ他の神に従ひて之に奉ふる勿れ然ば汝らはわが汝らと汝らの先祖に與へたるこの地に住ことをえんと然ど汝らは耳を傾けず我にきかざりき
 レカブの子ヨナダブの子孫はその先祖が彼らに命ぜしところの命令に遵ふなり然ど此民は我に聴す
 この故に萬軍の神エホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれユダとエルサレムに住る者にと我彼らにつきていひし所の災を降さん我かれらに語れども聴すかれらを召ども應へざればなり

茲にエレミヤ、レカブ人の家にいひけるは萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らはその先祖ヨナダブの命に遵ひその凡の誠を守り彼が汝らに命ぜしことを行ふ
 是によりて萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふレカブの子ヨナダブには我前に立つ人いつまでも缺ることあらじ

第三章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年にこの言エホバよりエレミヤに臨みていふ
 汝卷物をと語りしすべての言を之に録せ
 ユダの家わが降さんと擬るところの災をきよて各自その悪き途をはなれて轉ることもあらん然ばわれ其愆とその罪を赦すべし

是に於てエレミヤ、ネリヤの子バルクを召べりバルクすなはちエレミヤの口にしたがひエホバの彼に告た

イ耶三三・二三 二耶七二・五、二五・四 一三六・五 一三六・五 一三六・五
 口代下三六・二五 一耶一八・一、二五 一三六・四 一三六・四 一三六・四
 ハ耶七二・三、二五・三 一耶一八・一、二五 一三六・四 一三六・四 一三六・四
 一耶三三・二三 二耶七二・五、二五・四 一三六・五 一三六・五 一三六・五
 一耶一八・一、二五 一三六・四 一三六・四 一三六・四
 一耶三三・二三 二耶七二・五、二五・四 一三六・五 一三六・五 一三六・五
 一耶一八・一、二五 一三六・四 一三六・四 一三六・四

タ利一六・二九、二三 一耶三三・三
 二七・九 徒 一耶二六・一〇

まひし言をことごとく卷物に録せり
 エレミヤ、バルクに云けるはわれは禁錮られたればエホバの室に往くことを得ず
 故に汝ゆきて汝が我の口にしたがひて卷物に録したるエホバの言をよみ斷食の日にエホバの室に於て民の耳にこれを聴しめよまた之を讀みてユダの人々のその邑々より來れる者の耳に聴しむべし
 彼らエホバの前にその祈禱を献り各自其悪き途をはなれて轉ることもあらんエホバの此民につきてのべたまひし怒と憤は大なり
 斯てネリヤの子バルクは凡て預言者エレミヤが己に命ぜしごとくエホバの室にてその卷物よりエホバの言を讀り

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月エルサレムの諸の民およびユダの諸邑よりエルサレムに來れる諸の民にエホバの前に斷食を行ふべきこと宣示さる
 バルク、エホバの室の上庭に於てエホバの室の新しき門の入口の旁にあるシャバンの子なる書記ゲマリヤの房にてその書よりエレミヤの言を民に讀きかせたり

シャバンの子なるゲマリヤの子ミカヤその書のエホバの言を盡くきよて
 王の宮にある書記の房にくだりいたるに諸の牧伯等即ち書記エリシヤマ、シマヤの子デラヤ、アカボルの子エルナタン、シャバンの子ゲマリヤ、ハナニヤの子ゼデキヤおよび諸の牧伯等そこに坐せり
 ミカヤ、バルクが書を讀て民の耳に聴せしときに己が聴し所のすべての言を彼らに告げれば
 牧伯等クシの子シレミヤの子なるネタニヤの子エホデをバルクに遣していはせけるは汝が民に讀きかせしその卷物を手に取て來れとネリヤの子バルクすなはち手に卷物を取りて

彼らの許にきたりたれば
 彼らバルクにいひけるは請ふ坐して之を我らに讀きかせよとバルクすなはち彼らに讀聞せたり
 彼らその諸の言をきよて俱に懼れバルクにいひけるは我ら必ずこの諸の言を王に告んと
 また

一八 ンの王の牧伯等に降らずば此邑はカルデア人の手に付されん彼らは火をもて之を焚ん汝はその手を脱れざるべし
一九 ゼデキヤ王エレミヤに云けるは我カルデア人に降りしところのユダ人を恐る恐くはカルデア人我をかれらの
二〇 手に付さん彼ら我を辱しめん 二〇 エレミヤいひけるは彼らは汝を付さじ願くはわが汝に告しエホバの聲に聴した
二一 がひたまへさらば汝祥をえん汝の生命いきん 二二 然ど汝もし降ることを否まばエホバこの言を我に示し給ふ
二三 すなはちユダの王の室に遺れる婦は皆バビロンの王の牧伯等の所に曳いだされん其婦等いはん汝の朋友等は
二四 汝を誘ひて汝に勝り汝の足は泥に沈む彼らは退き去る 二五 汝の妻たちと汝の子女等はカルデア人の所に曳出され
二六 ん汝は其手を脱れじバビロンの王の手に執へられん汝此邑をして火に焚しめん
二七 ゼデキヤ、エレミヤにいひけるは汝この事を人に知する勿れさらば汝殺されし 二八 もし牧伯等わが汝と語
二九 りしことを我儕に告げよ我らに隠す勿れ然ば我ら汝を殺さじ又王の汝に語りしことを告よといは 二九 汝彼らに
三〇 答へて我王に求めて我をヨナタンの家に歸して彼處に死しむること勿れといへりといふべし 三〇 かくて牧伯等
三一 エレミヤにきたりて問けるに彼王の命せし言のごとく彼らに告たればその事露はれざりき是をもて彼ら彼とも
三二 いふことを罷たり 三三 エレミヤはエルサレムの取る、日まで獄の庭に居りしがエルサレムの取れし時にも彼處に
三三 をれり

第三十九章

一 ユダの王ゼデキヤの九年十月バビロンの王ネブカデネザルその全軍をひきゐエルサレムにきたり
二 て之を攻圍みけるが 三 ゼデキヤの十一年四月九日にいたりて城邑破れたれば 四 バビロンの王の
五 牧伯等即ちネルガルシヤレゼル、サムガルネボ、寺人の長サルセキム、博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロ

イ耶三二・四、三四、ハ耶三九・六、四一、ホ耶三七・二〇、
三、三八・二三、一〇〇、ト耶三七・二一、三九、チ王下二五・一、一四、リ耶三八・二七、
ロ耶三二・四、三三、二耶三八・一八、ト耶三七・二一、三九、耶五二・四一、七
又王下二五・四、耶一八、二三、カ結二二・一、三三、耶三八・一八、五二、
五二・七、王下二五・三三、三二、四、一三、三九・一〇、一一、耶三九・一〇、一一、
ル耶三二・四、三八、ワ耶四・二二、王下二五・九、耶、タ創三七・三六、耶、五二・二五、
ナ耶三八・七、一一、ラ創九・二二

ンの王のその外の牧伯等皆ともに入て中の門に坐せり

四 ユダの王ゼデキヤおよび兵卒ども之を見て逃げ夜の中に王の園の途より兩の石垣の間の門より邑をいでて

アラバの途にゆきしが 五 カルデア人の軍勢これを追ひエリコの平地にてゼデキヤにおひつき之を執へてハマテ

の地リブラにをるバビロンの王ネブカデネザルの許に曳ゆきければ王かしこにて彼の罪をさだめたり 六 すなは

ちバビロンの王リブラにてゼデキヤの諸子をかれの目の前に殺せりバビロンの王またユダのすべての牧伯等を殺

せり 七 またゼデキヤの目を抉さしめ彼をバビロンに曳ゆかんとて銅索に縛げり 八 またカルデア人火をもて

王の室と民の家をやき且エルサレムの石垣を毀てり 九 かくて侍衛の長ネブザラダンハ邑の中に餘れる民とおの

れに降りし者およびその外の遺れる民をバビロンに移せり 一〇 されど侍衛の長ネブザラダンはその時民の貧しく

して所有なき者等をユダの地に遺し葡萄園と田地とをこれにあたへたり

一一 爰にバビロンの王ネブカデネザル、エレミヤの事につきて侍衛の長ネブザラダンに命じていひけるは 一二 彼

を取りて善く待へよ害をくはふる勿れ彼が汝に云ふごとくなすべしと 一三 是をもて侍衛の長ネブザラダン寺人の

長ネブシヤスバン博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロンの王の牧伯等 一四 人を遣してエレミヤを獄の庭よ

りたづさへ來らしめシヤバンの子アヒカムの子なるゲダリヤに付して之を家につれゆかしむ斯彼民の中に居る

一五 エレミヤ獄の庭に禁錮られをる時エホバの言彼にのぞみていふ 一六 汝ゆきてエテオピア人エベデメレクに

告よ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふわれ我語しところの禍を此邑に降さん福はこれに降さじその日こ

の事なんぢの目前にならん 一七 エホバいひたまふその日にはわれ汝を救はん汝はその畏るゝところの人衆の手に

付されし 一八 われ必ず汝を救はん汝は剣をもて殺されし汝の生命は汝の掠取物とならん汝われに倚頼めばなり
とエホバいひたまふ

第四〇章

侍衛の長ネブザダガンかのバビロンにとらへ移さるゝエルサレムとユダの人々の中にエレミヤを
鏈につなぎおきてこれを執へゆきけるが遂にこれを放ちてラマを去しめたりその後エホバの言エレ
ミヤにのぞめり 茲に侍衛の長エレミヤを召てこれにいひけるは汝の神エホバ此處にこの災あらんことを言り
エホバこれを降しその云し如く行へり汝らエホバに罪を犯しその聲に聽したがはざりしによりてこの事汝らに
來りしなり 視よ我今日汝の手の鏈を解て汝を放つ汝もし我とともにバビロンにゆくことを善とせば來れわれ
汝を善くあしらはん汝もし我と偕にバビロンにゆくを惡とせば留視よこの地は皆汝の前に在り汝の善とする所
なんぢの心に合ふところに往べし 五 エレミヤいまだ答へざるに彼またいひけるは汝バビロンの王がユダの諸邑
の上にたてて有司となせしシャパンの子アヒカムの子なるゲダリヤの許に歸り彼とともに民の中に居れ或は汝の
善とおもふところにゆくべしと侍衛の長彼に食糧と禮物をとらせて去しめたり 六 エレミヤすなはちミツバに往
きてアヒカムの子ゲダリヤに詣りその地に遺れる民のうちに彼と偕にをる

茲に田舎にある軍勢の長等および彼らに屬する人々バビロンの王がアヒカムの子ゲダリヤを立てこの地の
有司となし男女嬰孩および國の中のバビロンに移されざる貧者を彼にあづけたることをきゝしかば 即ち
ネタニヤの子イシマエルとカレヤの子ヨハナンとヨナタンおよびタンホメテの子セラヤとネトバ人なるエバイの
諸子と或マアカ人の子ヤザニヤおよび彼らに屬する人々ミツバにゆきてゲダリヤの許にいたる 九 シャパンの子

イ耶二一九・四五・五 八耶三九・一四 九一・二 十王下二五・二二 十一王下二五・二五 耶
口代上五・二〇 詩 二五〇・七 二五二・二 二五三・二 二五四・二 二五五・二 二五六・二 二五七・二 二五八・二
三七一・四〇 二五九・二 二六〇・二 二六一・二 二六二・二 二六三・二 二六四・二 二六五・二 二六六・二 二六七・二 二六八・二 二六九・二 二七〇・二
ホ申二九・二四・二五 ト制二〇・二五 十一王下二五・二二 十二王下二五・二五 十三王下二五・二八 十四王下二五・三〇 十五王下二五・三五
ル王下二五・三三 十六王下二五・三六 十七王下二五・三九 十八王下二五・四二 十九王下二五・四五 二十王下二五・四八 二十一王下二五・五一
二十二王下二五・五四 二十三王下二五・五七 二十四王下二五・六〇 二十五王下二五・六三 二十六王下二五・六六 二十七王下二五・六九 二十八王下二五・七二
二十九王下二五・七五 三十王下二五・七八 三十一王下二五・八一 三十二王下二五・八四 三十三王下二五・八七 三十四王下二五・九〇 三十五王下二五・九三
三十六王下二五・九六 三十七王下二五・九九 三十八王下二五・一〇二 三十九王下二五・一〇五 四十王下二五・一〇八 四十一王下二五・一一一 四十二王下二五・一一四
四十三王下二五・一一七 四十四王下二五・一二〇 四十五王下二五・一二三 四十六王下二五・一二六 四十七王下二五・一二九 四十八王下二五・一三二 四十九王下二五・一三五
五十王下二五・一三八 五十一王下二五・一四一 五十二王下二五・一四四 五十三王下二五・一四七 五十四王下二五・一五〇 五十五王下二五・一五三 五十六王下二五・一五六
五十七王下二五・一五九 五十八王下二五・一六二 五十九王下二五・一六五 六十王下二五・一六八 六十一王下二五・一七一 六十二王下二五・一七四 六十三王下二五・一七七
六十四王下二五・一八〇 六十五王下二五・一八三 六十六王下二五・一八六 六十七王下二五・一八九 六十八王下二五・一九二 六十九王下二五・一九五 七十王下二五・一九八
七十一王下二五・二〇一 七十二王下二五・二〇四 七十三王下二五・二〇七 七十四王下二五・二一〇 七十五王下二五・二一三 七十六王下二五・二一六 七十七王下二五・二一九
七十八王下二五・二二二 七十九王下二五・二二五 八十王下二五・二二八 八十一王下二五・二三一 八十二王下二五・二三四 八十三王下二五・二三七 八十四王下二五・二四〇
八十五王下二五・二四三 八十六王下二五・二四六 八十七王下二五・二四九 八十八王下二五・二五二 八十九王下二五・二五五 九十王下二五・二五八 九十一王下二五・二六一
九十二王下二五・二六四 九十三王下二五・二六七 九十四王下二五・二七〇 九十五王下二五・二七三 九十六王下二五・二七六 九十七王下二五・二七九 九十八王下二五・二八二
九十九王下二五・二八五 一百王下二五・二八八 一百〇一王下二五・二九一 一百〇二王下二五・二九四 一百〇三王下二五・二九七 一百〇四王下二五・三〇〇 一百〇五王下二五・三〇三
一百〇六王下二五・三〇六 一百〇七王下二五・三〇九 一百〇八王下二五・三一二 一百〇九王下二五・三一五 一百一〇王下二五・三一八 一百一十一王下二五・三二一
一百一十二王下二五・三二四 一百一十三王下二五・三二七 一百一十四王下二五・三三〇 一百一十五王下二五・三三三 一百一十六王下二五・三三六 一百一十七王下二五・三三九
一百一十八王下二五・三四二 一百一十九王下二五・三四五 一百二十王下二五・三四八 一百二十一王下二五・三五一 一百二十二王下二五・三五四 一百二十三王下二五・三五七
一百二十四王下二五・三六〇 一百二十五王下二五・三六三 一百二十六王下二五・三六六 一百二十七王下二五・三六九 一百二十八王下二五・三七二 一百二十九王下二五・三七五
一百三十王下二五・三七八 一百三十一王下二五・三八一 一百三十二王下二五・三八四 一百三十三王下二五・三八七 一百三十四王下二五・三九〇 一百三十五王下二五・三九三
一百三十六王下二五・三九六 一百三十七王下二五・三九九 一百三十八王下二五・四〇二 一百三十九王下二五・四〇五 一百四十王下二五・四〇八 一百四十一王下二五・四一一
一百四十二王下二五・四一四 一百四十三王下二五・四一七 一百四十四王下二五・四二〇 一百四十五王下二五・四二三 一百四十六王下二五・四二六 一百四十七王下二五・四二九
一百四十八王下二五・四三二 一百四十九王下二五・四三五 一百五十王下二五・四三八 一百五十一王下二五・四四一 一百五十二王下二五・四四四 一百五十三王下二五・四四七
一百五十四王下二五・四五〇 一百五十五王下二五・四五三 一百五十六王下二五・四五六 一百五十七王下二五・四五九 一百五十八王下二五・四六二 一百五十九王下二五・四六五
一百六十王下二五・四六八 一百六十一王下二五・四七一 一百六十二王下二五・四七四 一百六十三王下二五・四七七 一百六十四王下二五・四八〇 一百六十五王下二五・四八三
一百六十六王下二五・四八六 一百六十七王下二五・四八九 一百六十八王下二五・四九二 一百六十九王下二五・四九五 一百七十王下二五・四九八 一百七十一王下二五・五〇一
一百七十二王下二五・五〇四 一百七十三王下二五・五〇七 一百七十四王下二五・五一〇 一百七十五王下二五・五一三 一百七十六王下二五・五一六 一百七十七王下二五・五一九
一百七十八王下二五・五二二 一百七十九王下二五・五二五 一百八十王下二五・五二八 一百八十一王下二五・五三一 一百八十二王下二五・五三六 一百八十三王下二五・五三九
一百八十四王下二五・五四二 一百八十五王下二五・五四五 一百八十六王下二五・五四八 一百八十七王下二五・五五一 一百八十八王下二五・五五四 一百八十九王下二五・五五七
一百九十王下二五・五六〇 一百九十一王下二五・五六三 一百九十二王下二五・五六六 一百九十三王下二五・五六九 一百九十四王下二五・五七二 一百九十五王下二五・五七五
一百九十六王下二五・五七八 一百九十七王下二五・五八一 一百九十八王下二五・五八四 一百九十九王下二五・五八七 二百王下二五・五九〇 二百〇一王下二五・五九三
二百〇二王下二五・五九六 二百〇三王下二五・五九九 二百〇四王下二五・六〇二 二百〇五王下二五・六〇五 二百〇六王下二五・六〇八 二百〇七王下二五・六一一 二百〇八王下二五・六一四
二百〇九王下二五・六一七 二百一〇王下二五・六二〇 二百一十一王下二五・六二三 二百一十二王下二五・六二六 二百一十三王下二五・六二九 二百一十四王下二五・六三二 二百一十五王下二五・六三五
二百一十六王下二五・六三八 二百一十七王下二五・六四一 二百一十八王下二五・六四四 二百一十九王下二五・六四七 二百二十王下二五・六五〇 二百二十一王下二五・六五三
二百二十二王下二五・六五六 二百二十三王下二五・六五九 二百二十四王下二五・六六二 二百二十五王下二五・六六五 二百二十六王下二五・六六八 二百二十七王下二五・六七一
二百二十八王下二五・六七四 二百二十九王下二五・六七七 二百三十王下二五・六八〇 二百三十一王下二五・六八三 二百三十二王下二五・六八六 二百三十三王下二五・六八九
二百三十四王下二五・六九二 二百三十五王下二五・六九五 二百三十六王下二五・六九八 二百三十七王下二五・七〇一 二百三十八王下二五・七〇四 二百三十九王下二五・七〇七
二百四十王下二五・七一〇 二百四十一王下二五・七一三 二百四十二王下二五・七一六 二百四十三王下二五・七一九 二百四十四王下二五・七二二 二百四十五王下二五・七二五
二百四十六王下二五・七二八 二百四十七王下二五・七三一 二百四十八王下二五・七三六 二百四十九王下二五・七三九 二百五十王下二五・七四二 二百五十一王下二五・七四五
二百五十二王下二五・七四八 二百五十三王下二五・七五二 二百五十四王下二五・七五六 二百五十五王下二五・七六〇 二百五十六王下二五・七六四 二百五十七王下二五・七六八
二百五十八王下二五・七七十二 二百五十九王下二五・七七六 二百六十王下二五・七八〇 二百六十一王下二五・七八四 二百六十二王下二五・七八八 二百六十三王下二五・七九二
二百六十四王下二五・七九六 二百六十五王下二五・八〇〇 二百六十六王下二五・八〇四 二百六十七王下二五・八〇八 二百六十八王下二五・八一二 二百六十九王下二五・八一六
二百七十王下二五・八二〇 二百七十一王下二五・八二四 二百七十二王下二五・八二八 二百七十三王下二五・八三二 二百七十四王下二五・八三六 二百七十五王下二五・八四〇
二百七十六王下二五・八四四 二百七十七王下二五・八四八 二百七十八王下二五・八五二 二百七十九王下二五・八五六 二百八十王下二五・八六〇 二百八十一王下二五・八六四
二百八十二王下二五・八六八 二百八十三王下二五・八七二 二百八十四王下二五・八七六 二百八十五王下二五・八八〇 二百八十六王下二五・八八四 二百八十七王下二五・八八八
二百八十八王下二五・八九二 二百八十九王下二五・八九六 二百九十王下二五・九〇〇 二百九十一王下二五・九〇四 二百九十二王下二五・九〇八 二百九十三王下二五・九一二
二百九十四王下二五・九一六 二百九十五王下二五・九二〇 二百九十六王下二五・九二四 二百九十七王下二五・九二八 二百九十八王下二五・九三二 二百九十九王下二五・九三六
三百王下二五・九四〇 三百〇一王下二五・九四四 三百〇二王下二五・九四八 三百〇三王下二五・九五二 三百〇四王下二五・九五六 三百〇五王下二五・九六〇 三百〇六王下二五・九六四
三百〇七王下二五・九六八 三百〇八王下二五・九七二 三百〇九王下二五・九七六 三百一〇王下二五・九八〇 三百一十一王下二五・九八四 三百一十二王下二五・九八八
三百一十三王下二五・九九二 三百一十四王下二五・九九六 三百一十五王下二五・一〇〇〇

アヒカムの子なるゲダリヤ彼らと彼らに屬する人々に誓ひていひけるは汝らカルデア人に事を怖るゝ勿れ
この地に住てバビロンの王に事へなば汝ら幸福ならん 一〇 我はミツバに居り我らに來らん所のカルデア人に事へ
ん汝らは葡萄酒と菓物と油とをあつめて之を器に蓄へ汝らが獲る所の諸邑に住めと 一一 又モアブとアンモン人の
中およびエドムと諸の邦にをる所のユダヤ人はバビロンの王がユダに人を遣したるとシャパンの子アヒカムの
子なるゲダリヤを立てこれが有司となしたることを聞り 一二 是においてそのユダヤ人皆その追やられし諸の處
よりかへりてユダの地のミツバに來りゲダリヤに詣り而して多の葡萄酒と菓物をあつむ 一三 又カレヤの子ヨハナンおよび田舎にをりし軍勢の長たちミツバにきたりてゲダリヤの許にいたり 彼に
いひけるは汝アンモン人の王バアリスが汝を殺さんとてネタニヤの子イシマエルを遣せしを知るやと然どアヒカ
ムの子ゲダリヤこれを信ぜざりしかば 一四 カレヤの子ヨハナン、ミツバにて密にゲダリヤに語りて言けるは請ふ
われゆきて人知らずにネタニヤの子イシマエルを殺さんいかで彼汝を殺し汝に集れるユダ人を散しユダの遺れる者
を滅すべけんやと 一五 然るにアヒカムの子ゲダリヤ、カレヤの子ヨハナンにいひけるは汝この事をなすべからず
汝イシマエルにつきて偽をいふなり

第四章

七月ごろ王の血統なるエリシャマの子ネタニヤの子イシマエル王の十人の牧伯等とともにミツバ
にゆきてアヒカムの子ゲダリヤにいたりミツバにて偕に食をなせしが 一 ネタニヤの子イシマエル
および偕にをりし十人の者起上りバビロンの王がこの地の有司となせしシャパンの子アヒカムの子なるゲダリヤ
を刀にて殺せり 二 イシマエルまたミツバにゲダリヤと偕にをりし諸のユダヤ人と彼處にをりしカルデア人の
兵卒を殺したり

また彼をして汝らを恤ませ汝らを故土に歸らしめん 然ど汝らもし我らはこの地に留らし汝らの神エホバの聲に遵はじと言ひ また然りわれらはかの戦争を見ず籟の聲をきかず食物に乏しからざるエジプトの地にいたりて彼處に住はんといはゞ 汝らユダの遺れる者よエホバの言をきけ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らもし強てエジプトにゆきて彼處に住はゞ 汝らが懼るゝところの劍エジプトの地にて汝らに臨み汝らが恐るゝところの饑饉エジプトにて汝らにおよばん而して汝らは彼處に死べし 凡そエジプトにおもむき至りて彼處に住はんとする人々は劍と饑饉と疫病に死べしその中には我彼らに降さんところの災を脱れて遺る者無るべし

萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我震怒と憤恨のエルサレムに住る者に注ぎし如くわが憤恨汝らがエジプトにいらん時に汝らに注がん汝らは呪詛となり詫異となり罵詈となり凌辱とならん汝らは再びこの處を見ざるべしと ユダの遺れる者よエホバ汝らにつきていひたまへり汝らエジプトにゆく勿れと汝ら今日わが汝らを警めしことを確に知れ 汝ら我を汝らの神エホバに遣して言へり我らの爲に我らの神エホバに祈り我らの神エホバの汝に示したまふ事をことごとく我らに告よ我ら之行はんと斯なんちら自ら欺けり われ今日汝らに告たれど汝らは汝らの神エホバの聲に遵はず汝らはエホバが我を遣して命ぜしめたまひし事には都て遵はざりき 然ば汝らはその往て住んとねがふ處にて劍と饑饉と疫病に死ることを今確に知るべし

第四章

一 エレミヤ諸の民にむかひて其神エホバの言を盡く宣べその神エホバが已を遣して言しめたまへる其諸の言を宣をはりし時 二 ホシヤの子アザリヤ、カレヤの子ヨハナンおよび驕る人皆エレ

イ耶四四・一六
ロ申一七・一六
ヨ耶三九・一〇、四〇

ハ路九・五一
ニ結一・一八
ホ耶二四・一〇、四二

ニ二二
ヘ耶四四・二四、二八
ト耶七・二〇

チ耶一八・一六、二四
ニ二二
九二六・六、二九
リ申一七・一六
ニ二二
四四・二二

ヲ耶四〇・二一、二二
カ耶四一・一〇、二〇
ヨ耶三九・一〇、四〇

レ耶二五・九、二七、二六
レ結二九・二八、二〇
ツ耶一五・二
ニ二二
ネ耶四六・二五
ム耶一九・一三

ミヤに語りていひけるは汝は 詭をいふ我らの神エホバはエジプトにゆきて彼處に住む勿れと汝をつかはして云せたまはざるなり 一 ネリヤの子バルク汝を咬して我らに逆はしむ是我らをカルデヤ人の手に付して殺さしめバビロンに移さしめん爲なり 二 スカレヤの子ヨハナンと軍勢の長等および民皆エホバの聲に遵はずしてユダの地に住ことをせざりき 三 斯てカレヤの子ヨハナンと軍勢の長等はユダに遺れる者即ちその逐やられし國々よりユダの地に住んとて皈りし者 四 男女嬰孩王の女たちおよび凡て侍衛の長ネブザラダンがシヤパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤに付し置し者並に預言者エレミヤとネリヤの子バルクを取て 五 エジプトの地に至れり 六 斯エホバの聲に遵はざりき而して遂にタバネスに至れり

エホバの言タバネスにてエレミヤに臨みていふ 汝大なる石を手に取りユダの人々の目の前にてこれをタバネスに在るパロの室の入口の旁なる磚密の泥土の中に藏して 彼らにいへ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ使者を遣してわが僕なるバビロンの王ネブカデネザルを召きその位をこの藏したる石の上に置しめん彼錦繡をその上に敷べし 一 かれ來りてエジプトの地を撃ち死に定まれる者を死しめ虜に定まれる者を虜にし劍に定まれる者を劍にかけん 二 われエジプトの諸神の室に火を燃さんネブカデネザル之を焚きかれらを虜にせん而して羊を牧ふ者のその身に衣を纏ふがごとくエジプトの地をその身に纏はん彼安然に其處をさるべし 三 彼はエジプトの地のベテシメシの偶像を毀ち火をもてエジプト人の諸神の室を焚べし

第四章

一 エジプトの地に住るところのユダの人衆すなはちミグドル、タバネス、ノフ、パテロスに住る者の事につきてエレミヤに臨みし言に曰く 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝ら我

三〇 さればエドムにつきてエホバの謀りたまひし御謀とテマンに住る者につきて思ひたまひし思をきけ群の
 三二 弱者はかならず曳ゆかれん彼かならずかれらの住居を滅すべし 三二 その傾圮の響によりて地は震ふ號咷ありその
 三三 聲紅海にきこゆ 三三 みよ彼鷹のごとくに上り飛びその翼をボズラの上に舒べんその日エドムの勇士の心は子を産
 三三 む婦の心の如くならん

三三 三三 ダマスコの事 ハマテとアルバデは羞づそは凶き音信をきけばなり彼らは心を喪へり海の上に恐懼あり安
 三三 三三 き者なし 三三 ダマスコは弱り身をめぐらして逃んとす恐懼これに及び憂愁と痛劬子を産む婦にあるごとくこれに
 三三 三三 およぶ 三三 頌美ある邑我欣ぶところの邑を何なれば棄さらざるや 三三 さればその日に壯者は街に仆れ兵卒は悉
 三三 三三 く滅されんと萬軍のエホバひたまふ 三三 われ火をダマスコの石垣の上に燃しベネハダデの殿舎をことごとく
 三三 三三 焚くべし

三三 三三 バビロンの王ネブカデネザルが攻め撃たるケダルとハヅルの諸國の事につきて
 三三 三三 エホバかくいひたまふ汝ら起てケダルに上り東の衆人を滅せ 三三 その幕屋とその羊の群は彼等これを取り
 三三 三三 その幕とその 諸の器と駱駝とは彼等これを奪ひとらん人これに向ひ惶懼四方にありと呼べし 三三 エホバひ
 三三 三三 たまふハヅルに住る者よ逃よ急に走りゆき深き處に居ればバビロンの王ネブカデネザル汝らをせむる謀略を運らし
 三三 三三 汝らをせむる術計を設けたればなり 三三 エホバひ給ふ汝ら起て 三三 穩なる安かに住める民の所に攻め上れ彼らは
 三三 三三 門もなく關もなくして獨り居ふなり 三三 その駱駝は擄掠とせられその多の畜は奪はれん我かの毛の角を剪る者を

イ耶五〇・四五 一三 摩一・三 耶 三〇・六、四八、
 口耶五〇・四六 九、二 耶 四一、四九、二二、
 ハ耶四一・三、四八、 ホ 摩五七・二〇 ト 耶三三・九、五一、 又 摩二一・一三 九、二二、
 四〇・四一、 一、 耶 一三、一八、 耶 四一、 又 摩二一・一三 九、二二、
 二、一七、一、三、七、 三、一、六、二、四、 耶 四一、 又 摩二一・一三 九、二二、
 二、一七、一、三、七、 三、一、六、二、四、 耶 四一、 又 摩二一・一三 九、二二、

牛耶四三・一〇 一、一、一、二、一、 耶 四一、 又 摩二一・一三 九、二二、
 ノ耶四八・四七、四九 一、一、一、二、一、 耶 四一、 又 摩二一・一三 九、二二、
 六、一、一、一、一、一、 耶 四一、 又 摩二一・一三 九、二二、

三三 四方に散しその滅亡を八方より來らせんとエホバひたまふ 三三 ハヅルは山犬の窟となり何までも荒蕪となりを
 三三 三三 らん彼處に住む人なく彼處に宿る人の子なかるべし
 三三 三三 ユダの王ゼデキヤが位に即し初のころエホバの言預言者エレミヤに臨みてエラムの事をいふ 三三 萬軍のエ
 三三 三三 ホバかくいひたまふ視よわれエラムが權能として頼むところの弓を折らん 三三 われ天の四方より四方の風をエラ
 三三 三三 ムに來らせ彼らを四方の風に散さんエラムより追出さるゝ者のいたらざる國はなかるべし 三三 エホバひたまふ
 三三 三三 われエラムをしてその敵の前とその生命を索むるもの前に懼れしめん我災をくだし我烈しき怒をその上にい
 三三 三三 たらせんまたわれ劍をその後につかはしてこれを滅し盡すべし 三三 われ我位をエラムに居る王と牧伯等を其處よ
 三三 三三 り滅したゝんとエホバひたまふ 三三 然ど末の日にいたりてわれエラムの擄移されたる者を返すべしとエホバひ
 三三 三三 したまふ

第五〇章

一 エホバ預言者エレミヤによりてバビロンとカルデア人の地のことを語りたまひし言
 二 汝ら國々の中に告げまた宣示せ森を樹よ隠すことなく宣示して言へバビロンは取られべしは
 三 辱められメロダクは碎かれ其像は辱められ其木像は碎かると 三 是は北の方より一の國人きたりて之を攻めそ
 四 の地を荒して其處に住む者無らしむばれなり人も畜も皆逃去れり 四 エホバひたまふその日その時イスラエル
 五 の子孫かへり來らん彼らと偕にユダの子孫かへり來るべし彼らは哭きつゝ行てその神エホバに請求むべし 五 彼
 六 ら面をシオンに向てその路を問ひ來れ我らは永遠わするゝことなき契約をもてエホバにつらならんといふべし
 七 我民は迷へる羊の群なりその牧者之をいざなひて山にふみ迷はしめられたれば山より岡とゆきめぐりて其休息

水の傍に住み多の財寶をもてる者よ汝の終汝の貪婪の限來れり 萬軍のエホバおのれを指して誓ひいひ給ふ
我まことに人を蝗のごとくに汝の中に充さん彼ら汝に向ひて鯨波の聲を揚ぐべし

エホバその能力をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒たまへり 彼聲を發
したまふ時は天に衆の水いづかれ雲を地の極より起らしめ電光と雨をおこし風をその庫よりいだしたまふ

べての人は獸のごとくにして智慧なし諸の鑄物師はその作りし像のために辱を取る其鑄るところの像は偽の者
にしてその中に靈なし 其等は空しき者にして迷妄の工作なりわが臨むとき其等は滅べし ヤコブの分は

此の如くならず彼は萬物およびその産業の族の造化主なりその名は萬軍のエホバといふ
汝はわが鎚にして戰の器具なりわれ汝をもて諸の邦を碎き汝をもて萬國を滅さん われ汝をもて馬とそ

の騎る者を推き汝をもて車とその御する者を碎かん われ汝をもて男と女をくだき汝をもて老たる者と幼き
者をくだき汝をもて壯者と童女をくだくべし われ汝をもて牧者とその群をくだき汝をもて農夫とその轆を負

ふ牛をくだき汝をもて方伯等と督宰等をくだかん 汝らの目の前にて我バビロンとカルデヤに住るすべての者
がシオンになせし諸の悪きことに報いんとエホバいひたまふ

エホバ言ひたまはく全地を滅したる滅す山よ視よわれ汝の敵となるわれ手を汝の上に伸て汝を巖より轉ば
し汝を焚山となすべし エホバいひたまふ人汝より石を取て隅石となすことあらじ亦汝より石を取りて基礎と

なすことあらじ汝はいつまでも荒地となりをらん
森を地に樹て籐を國々の中に吹き國々の民をあつめて之を攻めアララテ、ミンニ、アシケナズの諸國を招き

イ耶四九・一三 摩六 ハ耶五〇・一五 ホ伯九・八 詩一〇四 ト詩一三五七 五〇・二三
ヨ書一三・二 耶四七
ロ書三・一五 二創一・二六 耶一〇 一耶一〇・一三 二耶一〇・一四 三耶一〇・一五 四耶一〇・一六 五耶一〇・一七 六耶一〇・一八 七耶一〇・一九 八耶一〇・二〇 九耶一〇・二一 一〇耶一〇・二二 一一耶一〇・二三 一二耶一〇・二四 一三耶一〇・二五 一四耶一〇・二六 一五耶一〇・二七 一六耶一〇・二八 一七耶一〇・二九 一八耶一〇・三〇 一九耶一〇・三一 二〇耶一〇・三二 二一耶一〇・三三 二二耶一〇・三四 二三耶一〇・三五 二四耶一〇・三六 二五耶一〇・三七 二六耶一〇・三八 二七耶一〇・三九 二八耶一〇・四〇 二九耶一〇・四一 三〇耶一〇・四二 三一耶一〇・四三 三二耶一〇・四四 三三耶一〇・四五 三四耶一〇・四六 三五耶一〇・四七 三六耶一〇・四八 三七耶一〇・四九 三八耶一〇・五〇 三九耶一〇・五一 四〇耶一〇・五二 四一耶一〇・五三 四二耶一〇・五四 四三耶一〇・五五 四四耶一〇・五六 四五耶一〇・五七 四六耶一〇・五八 四七耶一〇・五九 四八耶一〇・六〇 四九耶一〇・六一 五〇耶一〇・六二 五一耶一〇・六三 五二耶一〇・六四 五三耶一〇・六五 五四耶一〇・六六 五五耶一〇・六七 五六耶一〇・六八 五七耶一〇・六九 五八耶一〇・七〇 五九耶一〇・七一 六〇耶一〇・七二 六一耶一〇・七三 六二耶一〇・七四 六三耶一〇・七五 六四耶一〇・七六 六五耶一〇・七七 六六耶一〇・七八 六七耶一〇・七九 六八耶一〇・八〇 六九耶一〇・八一 七〇耶一〇・八二 七一耶一〇・八三 七二耶一〇・八四 七三耶一〇・八五 七四耶一〇・八六 七五耶一〇・八七 七六耶一〇・八八 七七耶一〇・八九 七八耶一〇・九〇 七九耶一〇・九一 八〇耶一〇・九二 八一耶一〇・九三 八二耶一〇・九四 八三耶一〇・九五 八四耶一〇・九六 八五耶一〇・九七 八六耶一〇・九八 八七耶一〇・九九 八八耶一〇・一〇〇 八九耶一〇・一〇一 九〇耶一〇・一〇二 九一耶一〇・一〇三 九二耶一〇・一〇四 九三耶一〇・一〇五 九四耶一〇・一〇六 九五耶一〇・一〇七 九六耶一〇・一〇八 九七耶一〇・一〇九 九八耶一〇・一〇一〇 九九耶一〇・一〇一一 一〇〇耶一〇・一〇一二 一〇一耶一〇・一〇一三 一〇二耶一〇・一〇一四 一〇三耶一〇・一〇一五 一〇四耶一〇・一〇一六 一〇五耶一〇・一〇一七 一〇六耶一〇・一〇一八 一〇七耶一〇・一〇一九 一〇八耶一〇・一〇二〇 一〇九耶一〇・一〇二一 一〇一〇耶一〇・一〇二二 一〇一一耶一〇・一〇二三 一〇一二耶一〇・一〇二四 一〇一三耶一〇・一〇二五 一〇一四耶一〇・一〇二六 一〇一五耶一〇・一〇二七 一〇一六耶一〇・一〇二八 一〇一七耶一〇・一〇二九 一〇一八耶一〇・一〇三〇 一〇一九耶一〇・一〇三一 一〇二〇耶一〇・一〇三二 一〇二一耶一〇・一〇三三 一〇二二耶一〇・一〇三四 一〇二三耶一〇・一〇三五 一〇二四耶一〇・一〇三六 一〇二五耶一〇・一〇三七 一〇二六耶一〇・一〇三八 一〇二七耶一〇・一〇三九 一〇二八耶一〇・一〇四〇 一〇二九耶一〇・一〇四一 一〇三〇耶一〇・一〇四二 一〇三一耶一〇・一〇四三 一〇三二耶一〇・一〇四四 一〇三三耶一〇・一〇四五 一〇三四耶一〇・一〇四六 一〇三五耶一〇・一〇四七 一〇三六耶一〇・一〇四八 一〇三七耶一〇・一〇四九 一〇三八耶一〇・一〇五〇 一〇三九耶一〇・一〇五一 一〇四〇耶一〇・一〇五二 一〇四一耶一〇・一〇五三 一〇四二耶一〇・一〇五四 一〇四三耶一〇・一〇五五 一〇四四耶一〇・一〇五六 一〇四五耶一〇・一〇五七 一〇四六耶一〇・一〇五八 一〇四七耶一〇・一〇五九 一〇四八耶一〇・一〇六〇 一〇四九耶一〇・一〇六一 一〇五〇耶一〇・一〇六二 一〇五一耶一〇・一〇六三 一〇五二耶一〇・一〇六四 一〇五三耶一〇・一〇六五 一〇五四耶一〇・一〇六六 一〇五五耶一〇・一〇六七 一〇五六耶一〇・一〇六八 一〇五七耶一〇・一〇六九 一〇五八耶一〇・一〇七〇 一〇五九耶一〇・一〇七一 一〇六〇耶一〇・一〇七二 一〇六一耶一〇・一〇七三 一〇六二耶一〇・一〇七四 一〇六三耶一〇・一〇七五 一〇六四耶一〇・一〇七六 一〇六五耶一〇・一〇七七 一〇六六耶一〇・一〇七八 一〇六七耶一〇・一〇七九 一〇六八耶一〇・一〇八〇 一〇六九耶一〇・一〇八一 一〇七〇耶一〇・一〇八二 一〇七一耶一〇・一〇八三 一〇七二耶一〇・一〇八四 一〇七三耶一〇・一〇八五 一〇七四耶一〇・一〇八六 一〇七五耶一〇・一〇八七 一〇七六耶一〇・一〇八八 一〇七七耶一〇・一〇八九 一〇七八耶一〇・一〇九〇 一〇七九耶一〇・一〇九一 一〇八〇耶一〇・一〇九二 一〇八一耶一〇・一〇九三 一〇八二耶一〇・一〇九四 一〇八三耶一〇・一〇九五 一〇八四耶一〇・一〇九六 一〇八五耶一〇・一〇九七 一〇八六耶一〇・一〇九八 一〇八七耶一〇・一〇九九 一〇八八耶一〇・一〇一〇〇 一〇八九耶一〇・一〇一〇一 一〇九〇耶一〇・一〇一〇二 一〇九一耶一〇・一〇一〇三 一〇九二耶一〇・一〇一〇四 一〇九三耶一〇・一〇一〇五 一〇九四耶一〇・一〇一〇六 一〇九五耶一〇・一〇一〇七 一〇九六耶一〇・一〇一〇八 一〇九七耶一〇・一〇一〇九 一〇九八耶一〇・一〇一〇一〇 一〇九九耶一〇・一〇一〇一 一一〇〇耶一〇・一〇一〇二 一一〇一耶一〇・一〇一〇三 一一〇二耶一〇・一〇一〇四 一一〇三耶一〇・一〇一〇五 一一〇四耶一〇・一〇一〇六 一一〇五耶一〇・一〇一〇七 一一〇六耶一〇・一〇一〇八 一一〇七耶一〇・一〇一〇九 一一〇八耶一〇・一〇一〇一〇 一一〇九耶一〇・一〇一〇一 一一一〇耶一〇・一〇一〇二 一一一一耶一〇・一〇一〇三 一一一二耶一〇・一〇一〇四 一一一三耶一〇・一〇一〇五 一一一四耶一〇・一〇一〇六 一一一五耶一〇・一〇一〇七 一一一六耶一〇・一〇一〇八 一一一七耶一〇・一〇一〇九 一一一八耶一〇・一〇一〇一〇 一一一九耶一〇・一〇一〇一 一二〇耶一〇・一〇一〇二 一二〇一耶一〇・一〇一〇三 一二〇二耶一〇・一〇一〇四 一二〇三耶一〇・一〇一〇五 一二〇四耶一〇・一〇一〇六 一二〇五耶一〇・一〇一〇七 一二〇六耶一〇・一〇一〇八 一二〇七耶一〇・一〇一〇九 一二〇八耶一〇・一〇一〇一〇 一二〇九耶一〇・一〇一〇一 一二一〇耶一〇・一〇一〇二 一二一一耶一〇・一〇一〇三 一二一二耶一〇・一〇一〇四 一二一三耶一〇・一〇一〇五 一二一四耶一〇・一〇一〇六 一二一五耶一〇・一〇一〇七 一二一六耶一〇・一〇一〇八 一二一七耶一〇・一〇一〇九 一二一八耶一〇・一〇一〇一〇 一二一九耶一〇・一〇一〇一 一二二〇耶一〇・一〇一〇二 一二二一耶一〇・一〇一〇三 一二二二耶一〇・一〇一〇四 一二二三耶一〇・一〇一〇五 一二二四耶一〇・一〇一〇六 一二二五耶一〇・一〇一〇七 一二二六耶一〇・一〇一〇八 一二二七耶一〇・一〇一〇九 一二二八耶一〇・一〇一〇一〇 一二二九耶一〇・一〇一〇一 一二三〇耶一〇・一〇一〇二 一二三一耶一〇・一〇一〇三 一二三二耶一〇・一〇一〇四 一二三三耶一〇・一〇一〇五 一二三四耶一〇・一〇一〇六 一二三五耶一〇・一〇一〇七 一二三六耶一〇・一〇一〇八 一二三七耶一〇・一〇一〇九 一二三八耶一〇・一〇一〇一〇 一二三九耶一〇・一〇一〇一 一二四〇耶一〇・一〇一〇二 一二四一耶一〇・一〇一〇三 一二四二耶一〇・一〇一〇四 一二四三耶一〇・一〇一〇五 一二四四耶一〇・一〇一〇六 一二四五耶一〇・一〇一〇七 一二四六耶一〇・一〇一〇八 一二四七耶一〇・一〇一〇九 一二四八耶一〇・一〇一〇一〇 一二四九耶一〇・一〇一〇一 一二五〇耶一〇・一〇一〇二 一二五一耶一〇・一〇一〇三 一二五二耶一〇・一〇一〇四 一二五三耶一〇・一〇一〇五 一二五四耶一〇・一〇一〇六 一二五五耶一〇・一〇一〇七 一二五六耶一〇・一〇一〇八 一二五七耶一〇・一〇一〇九 一二五八耶一〇・一〇一〇一〇 一二五九耶一〇・一〇一〇一 一二六〇耶一〇・一〇一〇二 一二六一耶一〇・一〇一〇三 一二六二耶一〇・一〇一〇四 一二六三耶一〇・一〇一〇五 一二六四耶一〇・一〇一〇六 一二六五耶一〇・一〇一〇七 一二六六耶一〇・一〇一〇八 一二六七耶一〇・一〇一〇九 一二六八耶一〇・一〇一〇一〇 一二六九耶一〇・一〇一〇一 一二七〇耶一〇・一〇一〇二 一二七一耶一〇・一〇一〇三 一二七二耶一〇・一〇一〇四 一二七三耶一〇・一〇一〇五 一二七四耶一〇・一〇一〇六 一二七五耶一〇・一〇一〇七 一二七六耶一〇・一〇一〇八 一二七七耶一〇・一〇一〇九 一二七八耶一〇・一〇一〇一〇 一二七九耶一〇・一〇一〇一 一二八〇耶一〇・一〇一〇二 一二八一耶一〇・一〇一〇三 一二八二耶一〇・一〇一〇四 一二八三耶一〇・一〇一〇五 一二八四耶一〇・一〇一〇六 一二八五耶一〇・一〇一〇七 一二八六耶一〇・一〇一〇八 一二八七耶一〇・一〇一〇九 一二八八耶一〇・一〇一〇一〇 一二八九耶一〇・一〇一〇一 一二九〇耶一〇・一〇一〇二 一二九一耶一〇・一〇一〇三 一二九二耶一〇・一〇一〇四 一二九三耶一〇・一〇一〇五 一二九四耶一〇・一〇一〇六 一二九五耶一〇・一〇一〇七 一二九六耶一〇・一〇一〇八 一二九七耶一〇・一〇一〇九 一二九八耶一〇・一〇一〇一〇 一二九九耶一〇・一〇一〇一 一三〇〇耶一〇・一〇一〇二 一三〇一耶一〇・一〇一〇三 一三〇二耶一〇・一〇一〇四 一三〇三耶一〇・一〇一〇五 一三〇四耶一〇・一〇一〇六 一三〇五耶一〇・一〇一〇七 一三〇六耶一〇・一〇一〇八 一三〇七耶一〇・一〇一〇九 一三〇八耶一〇・一〇一〇一〇 一三〇九耶一〇・一〇一〇一 一三一〇耶一〇・一〇一〇二 一三一〇

て之を攻め軍長をたて、之を攻め恐ろしき蝗のごとくに馬をすゝめよ 國々の民をあつめて之を攻めメデア人
の王等とその方伯等とその督宰等およびそのすべての領地の人をあつめて之を攻めよ 地は震へ搖かんそはエ

ホバその意旨をバビロンになしバビロンの地をして住む人なき荒地とならしめたまふべければなり 巴ビロン
の勇者は戰をやめて其城にこもりその力失せて婦のごとくにならん其宅は焼けその門門は折れん 駟は趨て

駟にあひ使者は趨て使者にあひバビロンの王につけて呂は盡く取られ 渡口は取られ沼は焼れ兵卒は怖ると
いはん

萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ巴ビロンの女は禾場のごとしその踏るゝ時きたれり暫くあ
りてその刈るゝ時いたらん 巴ビロンの王ネブカデネザル我を食ひ我を滅し我を空器のごとくなし龍の如く

に我を呑みわが珍饈をもて其腹を充し我を逐出せり シオンに住る者いはんわがうけし虐遇と我肉はバビロン
にかゝるべしエルサレムいはん我血はカルデヤに住る者にかゝるべしと さればエホバかくいひたまふ視よ

われ汝の訟を理し汝の爲に仇を復さん我その海を涸かし其泉を乾かすべし 巴ビロンは頽壘となり山犬の
巢窟となり詫異となり嗤笑となり人なき所とならん 彼らは獅子のごとく共に吼え小獅のごとくに吼ゆ 彼

らの怒の燃る時にわれ筵を設けてかれらを酔せ彼らをして喜ばしめながき寢にいりて目を醒すことなからしめ
んとエホバいひたまふ われ屠る羔羊のごとく又牡羊と牡山羊のごとくにかれらをくだらしめん

セシヤクいかにして取られしや全地の人の頌美者いかにして執へられしや國々の中にバビロンいかにして
エレミヤ記 五一・二八—四一

耶利米亞の哀歌

第一章

一 あゝ哀しいかな古昔は人のみちみちたりし此都邑 いまは凄しき様にて坐し寡婦のごとくになれり
 二 嗟もろもろの民の中にて大いなりし者もろもろの州の中に女王たりし者いまはかへつて貢を
 三 いる者となりぬ 彼よもすがら痛く泣きかなしみて涙面になる その戀人の中にはこれを慰むる者ひとり
 四 だに無くその朋はこれに背きてその仇となれり ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて據
 五 はれゆきもろもろの國に住ひて安息を得ずこれを追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ シオンの道路は節
 六 會に上り來る者なきがために哀しみ その門はことごとく荒れその祭司は歎きその處女は憂へシオンもまた自
 七 から苦しむ その仇は首となりその敵は亨ゆその愆の多きによりてエホバこれをなやませたまへるなりその
 八 わかき子等は據はれて仇の前にゆけり シオンの女よりはその榮華ことごとく離れされりまたその牧伯等は草
 九 を得ざる鹿のごとくに成りおのれを追ふもの前に力つかれて歩みゆけり エルサレムはその艱難と窘迫の時
 一〇 むかしの代にありしもろもろの樂しき物を思ひ出づその民仇の手におちいり誰もこれを助くるものなき時 仇人
 一一 これを見てその荒はてたるを笑ふ エルサレムははなはだしく罪ををかしたれば汚穢たる者のごとくなれり
 一二 前にこれを尊とびたる者もその裸體を見しによりて皆これをいやしむ是もまたみづから嗟き身をそむけて退ぞ
 一三 けり その汚穢これが裾にあり彼その終局をおもはざりき 此故に驚ろくまでに零落たり 一人の慰さむる者だ
 一四 に無しエホバよわが艱難をかへりみたまへ 敵は勝ほこれり 敵すでに手を伸てその財寶をことごとく奪ひ

イ 哀四七・七、八 二 耶一三・一七 へ 哀一九・一六、一七 申二八・六四、六五 又 耶三〇・一四、一五 王上八・四六 結一六・三七、三三
 ハ 伯七・三〇 詩六六 赤 耶四・三〇、三〇 一四 哀一・一九 二 耶五二・二七 申二八・四三、四四 九 九・七、一六 王上八・四六 耶一三・二二、二六 申三三・二九 結一七・二二
 ソ 申二三・三 尼一三 ナ 伯九・二二 一 九二・一〇、一九 申四四・三一 一 六二 耶四・
 ツ 耶五・五一 一 一五 申一三・一七、一四 申九・三三 但九 一 九、四八、三六
 申三三・九、五二、六 申二八・四八 申二七・二八 申二七・二八 申二七・二八 申二七・二八 申二七・二八
 哀二・二、四、四 申六三・三、三 哀一四 申二七・二九 申二七・二九 申二七・二九 申二七・二九 申二七・二九

たり汝さきに異邦人等はなんぢの公會にいるべからずと命じおきたまひしに 彼らが聖所に侵しいるをシオンは
 見たり 二 その民はみな哀きて食物をもとめその生命を支へんがために財寶を出して食にかへたり エホバよ
 見そなはし我のいやしめらるゝを願ひみたまへ すべて行路人よなんぢら何ともおもはざるか エホバそ
 の烈しき震怒の日に我をなやましてわれに降したまへるこの憂苦にひとしき憂苦また世にあるべきや考がへ見よ
 エホバ上より火をくだしわが骨にいられて之を克服せしめ 網を張りわが足をとらへて我を後にむかしめ 我を
 して終日心さびしくかつ疾わづらはしめたまふ わが愆尤の鞭は主の御手にて結ばれ諸の愆あひ纏はりてわが
 項にのれり 是はわが力をしておとろへしむ 主われを敵たりがたき者の手にわたしたたまへり 主われの中なる
 勇士をことごとく除き 節會をもよほして我を攻めわが少き人を打ほろぼしたまへり 主酒樽をふむがごとくに
 ユダの處女をふみたまへり これがために我なげく わが目やわが目には水ながる わがたましひを活すべき慰
 さむるものわれに遠ければなり わが子等は敵の勝るによりて滅びうせにき シオンは手をのぶれども誰もこ
 れを慰さむる者なし ヤコブにつきてはエホバ命をくだしてその周圍の民をこれが敵とならしめたまふ エルサレ
 ムは彼らの中にありて汚れたる者のごとくなりぬ エホバは正し 我その命令にそむきたるなり 一切の民よ
 われに聴け わが憂苦をかへりみよ わが處女もわかき男も俘囚て往り われわが戀人を呼たれども彼らはわれ
 を欺むけり わが祭司およびわが長老は生命を繋がんとして食物を求むる間に都邑の中に氣息たえたり
 エホバよかへりみたまへ 我はなやみてをり わが腸わきかへり わが心わが裏に顛倒す 我甚しく悖りたればなり

エホバは正し 我その命令にそむきたるなり 一切の民よ
 われに聴け わが憂苦をかへりみよ わが處女もわかき男も俘囚て往り
 われわが戀人を呼たれども彼らはわれを欺むけり
 わが祭司およびわが長老は生命を繋がんとして食物を求むる間に都邑の中に氣息たえたり
 エホバよかへりみたまへ 我はなやみてをり わが腸わきかへり わが心わが裏に顛倒す 我甚しく悖りたればなり

異邦人の中間にても人々また言ふ 彼らは此に寓るべからずと エホバ怒れる面をもてこれを散し給へり 再びこれを顧みたまはし 人々祭司の面をも尊ばず 長老をもあはれまざりき われらは頼まれぬ救援を望みて 目つかれおとろふ 我らは俟むたりしが救拯をなすこと能はざる國人を待をりぬ 敵われらの脚をうかざへば 我らはおのれの街衢をも歩くことあたはず 我らの終ちかづけり 我らの日つきたり 即ち我らの終きたりぬ 我らを追ふものは天空ゆく鷲よりも迅し 山にて我らを追ひ野に伏てわれらを伺ふ かの我らが鼻の氣息たる者 エホバに膏そゝがれたるものは陥 阱にて執へられにき 是はわれらが異邦にありてもこの蔭に住んとおもひたりし者なり ウズの地に住むエドムの女よ悦び樂しめ 汝にもまたつひに 杯めぐりゆかん なんぢも酔て裸になるべし シオンの女よなんぢが愆の罰ははれり 重ねてなんぢを擧へゆきたまはし エドムの女よなんぢの愆を罰したまはん 汝の罪を露はしたまはん

第五章

エホバよ我らにありし所の事をおもひたまへ 我らの恥辱をかへりみ觀たまへ われらの産業は 外國人に歸し われらの家屋は他國人の有となれり われらは孤子となりて父あらず われらの母は寡婦にひとし われらは金を出して自己の水を飲み おのれの薪を得るにも價をはらふ われらを追ふ者 われらの頸に迫る 我らは疲れて休むことを得ず 食物を得て饑を凌がんとて エジプト人およびアツスリヤ人に手を與へたり われらの父は罪ををかして已に世にあらず 我らその罪を負ふなり 奴僕等われらを制するに 誰ありて我らを之が手よりすくひ出すものなし 荒野の刀兵の故によりて我ら死を冒して食物を得 饑饉の

イ哀五・二二 王下二五・四、五 創二七・哀二九 二一 阿一〇
 口王下二四・七 哀 二結七・二三、六 摩 下五二九 結二二 又 哀四〇・二
 二〇・五、三〇・六 八二・二 一三・一九、四八 九 詩一三七・七 又 申二八・四八 耶 三三・二九 結 一八・二
 七 耶三七・七 結 申二八・四九 耶 三三・二九 結 一八・二 又 申二八・四八 耶 三三・二九 結 一八・二
 二九・一六 四・二三 耶 三三・二九 結 一八・二 又 申二八・四八 耶 三三・二九 結 一八・二

ナ伯三〇・三〇 詩一 一四・二 哀四 申一六・二二 王上二六・二二 詩八九 九 詩九・七、一〇・一
 一六 哀四 申一六・二二 王上二六・二二 詩八九 九 詩九・七、一〇・一 一六 哀四 申一六・二二 王上二六・二二 詩八九 九 詩九・七、一〇・一

烈しき熱氣によりてわれらの皮膚は爐のごとく熱し シオンにて婦女等をかされユダの邑々にて處女等けがさる 侯伯たる者も敵の手にて吊され 老たる者の面も尊とばれず 少き者は石磨を擔はせられ 童子は薪を負ふてよるめき 長老は門にあつまることを止め少き者はその音楽を廢せり 我らが心の快樂はすでに罷みわれらの跳舞はかはりて悲哀となり われらの冠冕は首より落たり われら罪ををかしたれば禍なるかな これが爲に我らの心うれへこれらのために我らが目くらくなれり シオンの山は荒はて山犬その上を歩くなり エホバよなんぢは永遠に在す なんぢの御位は世々かぎりなし 何とて我らを永く忘れわれらを斯ひさしく棄おきたまふや エホバよねがはくは我らをして汝に歸らしめたまへ われら歸るべし 我らの日を更新して昔日の日のごとくならしめたまへ さりとて汝まつたく我ら棄てたまひしや 痛くわれらを怒りたまふや

エレミヤの哀歌 をはり